

盗賊のインド史（二）——近代国家の周縁——

竹中千春

はじめに——合法と違法の間

第一章 独立インドと盗賊

第一節 盗賊の女王——プーラン・デーヴィー

第二節 盗賊の土地——チャンバル溪谷

第三節 盗賊現象の分析

第四節 プーランの生涯（以上本号）

第二章 植民地国家と盗賊

むすびにかえて——参加民主主義への道

はじめに——合法と違法の間

法とはもともと合法と違法とを区切る境界線である。いいかえれば、法を措定するということは、現実社会の中

に合法の世界と違法の世界を作り出すことにほかならない。そして、違法の世界が幅をきかせば、法の存在を有効にする力よりもそれを否定する力のほうが優越し、合法的な世界が意味を喪失する。無法地帯、紛争地域、内戦状況といった言葉は、そのような状況の出現を指している。したがって、国家が存立の基盤を確保するには、管轄区域の中の「法と秩序 (law and order)」を実現する努力を絶えず払い、そのための十分な制度・人材・資源を確保し、法に挑戦するどのような社会的勢力にも優位する強制力を備えかつ行使しなければならぬ。

ということとは、いかに完璧に見える国家においても、合法的な世界だけが存在しているわけではなく、合法性を破られた壁の向こう側には法を越えた領域として違法ないしは無法の世界が潜んでいる。そうした世界の中では国家の暴力的な独占は崩れ、国家以外の主体が暴力を行使して自らの「法」を人々に強制することが可能となる。そして、そのような主体が登場する背景には独特の社会史が存在し、彼らの暴力的な行為には一定の範囲内で受け入れられるような、それなりの正当な言い分が存在する場合も多い。だが、国家の側からすればあくまでも国家に向かつて違法行為に手を染める「無法者」「犯罪者」であり、より新しくは「反政府武装勢力」「テロリスト」などと呼ばれて、断固として鎮圧されるべき対象である。⁽¹⁾

要するに、近代国家の成立過程は、国家がそれ以外の暴力的な社会集団とのせめぎ合いの中から「至上の権力」として自らの秩序を確立する過程であり、西ヨーロッパにおいては中世の封建社会が崩れて絶対主義国家が登場する時代に、新しい「法と秩序」の体制が形成されたことは周知の通りである。⁽²⁾ それでは、そうした西ヨーロッパの一角を占めるイギリスによって一八世紀後半から一九世紀にかけて植民地化された英領インドでは、どのような形でこの国家形成過程が展開したのだろうか。つまり、産業革命のエネルギーを源に圧倒的に優位する軍勢力と経済力を資源として、ヨーロッパから遠く離れたインド亜大陸に「植民地国家 (colonial state)」を移植したイギリスは、どのように自らの国家に挑戦する社会的な暴力を駆逐し、新しい「法と秩序」を樹立したのだろうか。そし

て、植民地国家を引き継いだ「ポストコロニアル国家 (postcolonial state)」としての「国民国家 (nation-state)」には、どのような体制が引き継がれたのだろうか。⁽⁶⁾

本稿では、このような関心から、近現代インドにおける盗賊に歴史的な焦点をあてて分析を試みたい。国家的な合法性の境界線を脅かし、犯罪者として討伐や処罰の対象となってきた存在とはどのような人々なのか。そのような人々の活動に対峙した国家とは、歴史的にどのような性格を持つものとして形成されたのだろうか。さらに、そのような政治過程の下で形成された植民地的な体制とはどのような特徴を持っていたのか。それらの特徴は、独立後、さらには今日まで引き継がれているのだろうか。

第一章「独立インドと盗賊」では、一九七〇年代末から八〇年代初めに注目を浴び「盗賊の女王 (Bandit Queen)」と呼ばれたプーラン・デーヴィーに焦点を当てて、盗賊の現代的な実像を紹介するとともに、現代の盗賊現象について考察する。第二章は「植民地国家と盗賊」というテーマで、一九世紀におけるイギリスの進出と国家形成の過程で、新しい法制度が導入されるとともに、いかに多様な人々が「盗賊」ないしは他の形の「犯罪者」として処罰され、統制されたのかを考察する。「むすびにかえて」では、近代国家によって排除され抑圧されてきた社会的に下層の人々が、現代民主主義のダイナミズムの中で、より制度的な形で自己主張を展開し、政治的な参加を実現してきた過程を分析する。こうした動きと関連して、「盗賊」やその他の「犯罪行為」に関わってきた人々はどこへ行つたのだろうか。こうした点を考えながら、最後にもう一度プーラン・デーヴィーを取り上げて議論してみたい。

それではまず、現代インドの盗賊の世界へと目を向けてみよう。

第一章 独立インドと盗賊

第一節 盗賊の女王——プーラン・デーヴィー

二〇〇一年七月二五日、かつて「盗賊の女王」という異名を取ったプーラン・デーヴィー (Phoolan Devi) が、首都ニューデリーの中心にあるアシヨカ通り四四番地の議員公邸前で三名の狙撃者に射殺された。ウツタル・プラデーシ州選出のサマディワディ党 (Samadivadi Party: S P, 社会党) に属す国会議員として、開会中の下院 (Lok Sabha) から昼休みで帰宅したときを襲われ、ボディガードともに公用車を降りた途端に銃弾六発を浴びた。病院に運ばれたが、頭部に三発の銃弾が命中しており、ほぼ即死だったという。犯人は直ちに緑色のマルティ小型車で逃亡した。⁽⁴⁾

なぜ殺害されたかについては、直ちにさまざまな憶測が流れた。近く予定されていた州選挙をめぐる政党間争い、プーランが二〇年前に関わったとされて罪を問われていたベーマイ (Behmai) 村虐殺事件の関係者による復讐、私的な金銭をめぐる夫を含むプーラン周辺の人々の企みなどである。しかし、二日後に犯人がデリーのプレス・クラブで記者会見をし、殺害したことを認め、ベーマイ村でプーランの盗賊団に惨殺された上層のカーストであるタークル一族の無念を晴らすための復讐だったと語った。しかし、実際に、この犯人の裏で誰が事件の糸を引いていたのかは、ただちに明らかにされなかった。

メディア界ではプーランの死がセンセーショナルに取り上げられたものの、「殺されても仕方がない犯罪者だった」という解釈が主流で、その意味では冷たい取り上げられ方に終始した。その背景には、ジャーナリストや評論

家など「健全な市民社会」の世論を構成する都市のミドルクラスにとって「盗賊団として強盗殺人を行ったプーランとその一味が処罰されるべきだ」という見解はあまりにも当然のものだったからである。また、国会議員が射殺されたというのにインド人民党の下の中央政府はほとんど衝撃を受けず、興味深いほど平静な対応を示した。二二人を殺害した殺人集団の指導者として刑事訴追されながら、それでもなお人民党のもっとも強い基盤のウツタル・プラデーシュ州で、野党の政治家として大きな人気を博している彼女が、文字通り「消えてくれる」ことは、選挙戦を争う与党にとって頭の痛い「問題」が解決したことでもあったに違いない。⁽⁵⁾

しかし、プーランの死は、単に一人の女性の政治家の死を越えて、インドの一つの時代が終わったことを象徴していた、と思う。この死は、二〇年前に「盗賊の女王」としてプーランが人々の前に姿を現したときから、すでに予想されていた出来事ですらあったかもしれない。彼女の言葉によれば、時の首相であったインド国民会議派党首のインディラ・ガンディーと「直に取引して」、マディヤ・プラデーシュ州の警察長官の前に銃を持って堂々と投降した彼女は、まだ二〇代初めの娘にすぎなかった。仲間の男たちを率いて、黒髪にサフラン色の鉢巻きを巻き、瘦せた腕にライフルを握りしめ、日に焼けた肌の顔に笑顔を浮かべながら、「女神 (devi)」は姿を現した。メデアはプーランが美女ではなかったとか、実際には銃撃戦の頭ではなかったなどときこ下ろしたが、野次馬的であったにせよ、多くの人々はプーランを自分たちの「女神」として讃えた。⁽⁶⁾

イギリスの社会史家ホブズボームは、著書『盗賊 (Bandits)』の中で、「無法者 (outlaw)」に目を向けて、資本主義的な市場経済や近代的な国家によって引き起こされた伝統的な農村社会の動揺が始まった地域、あるいは西欧大国の帝国主義的支配の下での植民地化が進められ社会的な変容を余儀なくされた地域で、「社会的な盗賊 (social bandits)」が伝統社会の側の抵抗として登場したと論じたことはよく知られている。「この種の社会的な盗賊は、もっとも普遍的な社会現象」であり、「中国でもインドネシアでも、ペルーでもウクライナでも」、つまり世界のさ

さまざまな地域で「同一の現象が見られた」と言い、次のように説明している。

山や森で、法や政府の手の届かないところで一団となった男たち（伝統的に女性ほとんどいない）が、武装して暴力を使い、略奪・強盗・その他の方法で犠牲者に自分たちの意志を強要する。同時に、そうすることで、盗賊たちは経済・社会・政治的な秩序に挑戦している。つまり、権力や法や資源をコントロールする権利と力を持つ者たちに挑戦するのである。これが、国家が支配し階級的に分裂した社会において、盗賊が担う歴史的な意義である。この本のテーマである「社会的な盗賊」こそが、こうした挑戦の一面を表している。⁽⁷⁾

ホブズボームのいう「社会的な盗賊」とは、単なる盗みを働く犯罪者としての盗賊ではなくて、民衆の支持を集めて一種の英雄神話を作り出すような人々で、「貧しい紳士強盗 (impoverished gentlemen-robbers)」「盗賊紳士 (bandit gentry)」「強盗騎士 (robber knights)」などとも呼ばれた。

彼らは、農民の無法者で、領主や国家は犯罪者と見なすが、農民の社会に生き、その同胞の人々からは、英雄・チャンピオン・報復者・正義の戦士と見られ、解放の指導者と考えられることすらある。いずれにせよ、人々が賞賛・援助・支持して当然の男たちだということになる。現地権力であれ外国権力であれ、中央集権的な政府や国家が伝統的な社会を包囲し侵食する過程では、土地の領主ですらこの種の盗賊を助け支援するだろう。⁽⁸⁾

産業革命や植民地化によって、近代的な国家や市場の中心地から農業資本主義 (agrarian capitalism) への変化を促す圧力が及んで、土地の部族社会や血縁集団の組織が変貌ないしは解体させられ、伝統的な農業や採集経済の社会で生きていた人々は農業労働者や農村の外の鉱工業労働者へと半ば強制的に変えられていく。そのような歴史的

過程で出現する現象が、「社会的な盗賊」である。部族社会や血縁的な農業社会においては、人々が武装していることは暮らしの上で当たり前であったし、とくに狩猟や放牧を主とする集団の場合には家同士の宿根の争い (Feuding) や襲撃 (raiding) は当たり前のものであった。対立する者同士の紛争は血族や村の共同体的な話し合いの中で解決されるか、あるいは流血の暴力を使って解決されるかであり、仮に暴力的な方法を用いても、正当な根拠があれば、犯罪者にはならなかったのである。けれども、このように生きてきた人々が、資本主義的な変動の波を被り、新たな階級対立に晒されたとき、多くの盗賊を輩出する集団となる、という仮説である。⁽⁹⁾

ただし、ボブズボームは、このように国家形成と資本主義化の過程で現れる「社会的な盗賊」と、単なる犯罪組織としての盗賊団、あるいは盗賊を生業とする部族とは、異なる主体だと注意している。とくに、「社会的な盗賊」は、自分の仲間の農民から盗むという盗賊行為を行わない。必ず、国家や新しい商人層や不在地主という「階級」を襲うからである。ボブズボームは、一二世紀初頭のシチリア地方の盗賊について記述した、次のようなアントニオ・グラムシの文章を引用する。「階級闘争は、山賊行為、恐喝、森林地の放火、家畜殺し、女性や子どもの誘拐、役所の襲撃といった行為と混ざり合って展開される」⁽¹⁰⁾。

こうした仮説に照らすと、一九七〇—八〇年代のインドに登場したプーラン・デーヴィーもまた、単なる強盗団の首領ではなく、政治家・役人・警察、あるいは地主・商人・金貸し、つまり権力やお金を持つ「強き者」をくじき、盗品を寺に寄進し、農村に分け前をばらまいて、貧しくカースト身分の低い農民という「弱き者」を助ける「盗賊」、現地で親しまれている言葉を使えば「ダコイト (dacoit)」という伝説的な「無法者」の末裔となったと解釈できるだろう。噂で知られた彼女の過去は、農民が身に沁みて知っている貧しさ、いじめ、差別、児童労働、暴力的な虐待、性的虐待を引きずっていた。けれども、プーランは逆境に負けずに自身の力で生き延び、「目には目を」というべき復讐を敢行した。その不敵な「女神」に、人々は喝采を送り、「姿を拝む (darshan)」ために数千

の規模で集まった⁽¹⁾。

さて、プーラン・デーヴィーは、筆者には特別な存在である。一九八一年留学先のデリーで、連日新聞の一面を飾っていたのが、「盗賊の女王」の記事だった。一九七七年春、インド国民会議派党首インディラ・ガンディーの敷いた非常事態体制を選挙で倒したジャナタ (Janata: 人民) 連合が成立したが、その第二次内閣は早々に七九年下野し、再びインド国民会議派のガンディーが政権に返り咲いていた。二五パイサ (日本円で八円くらい) だった『タイムズ・オブ・インディア (The Times of India)』や『ステーツマン (The Statesman)』などの新聞には、植民地時代の頃から使われ続けているような小さな活字で記事が組まれていて、ところどころ印字は歪み、古色蒼然たる英語表現で理解できない記事ばかりが並んでいた。けれども、プーランの記事が出ると、それでも一生懸命読もうとしたことは憶えている。文中には、必ず「武装勢力 (militants)」といった言葉と並んで *dacoit* とか *encounter* という言葉が出てくる。日本から持参した辞書には出ていないので、*dacoit* は英語の *bandit* とほぼ同じ現地語で「盗賊」を意味し、英語の *encounter* は軍や警察と盗賊の武装集団との「遭遇」さらには「衝突」を意味すると知るまで、ずいぶん時間がかかった。そもそも、そのような武力衝突が首都からそれほど離れていない場所で日常的に起こっていること自体が、筆者の想像の範囲を越えていたのだろう。

後にプーランは筆者とほぼ同年代の女性だということがわかったが、当時はともかくロビン・フッドのように謎めいた存在で、公に姿を現さず、当然写真はなく、報道で伝えられる数々の武勇伝がいつその神秘さを醸し出していた。銃を担いで盗賊の男たちを率い、金持ちを襲って盗みをはたらき、民衆には絶大な人気がある。森の中を駆け回り、警察の特殊部隊の追撃を出し抜き続けている。テレビが普及していない頃だったので、新聞報道のみが頼りだったが、記事の見出しを見るだけで、昨日も彼女は逃げきったらしい、と私でさえ心の中でつぶやいていた。もともと、この「現代の盗賊」というテーマには関心があったものの、政治学の議論の中で器用に取り上げる

力もないまま胸の中にしまい込んでいた。

しかし、一五年以上経って、今度は政治学者としてもう一度プーラン・デーヴィーを思い起こすことになった。かつての「盗賊の女王」が一九九三年に恩赦で釈放され、九六年総選挙ではサマデイワディ党の候補者として圧倒的な票を集めて国会議員に当選したからである。かつての「盗賊の女性」が制度的に国民を代表する存在になったという事実が、一九九〇年代のインドの政治の重要な特徴を示しているように思われた。⁽¹²⁾

そうしたナイーヴな関心をもとに、彼女の死の一年前である二〇〇〇年二月に初めて本人にインタビューを行うことができた。そのときは、ニューデリーに彼女自身が購入した、ミドルクラス以上の豊かなベンガル人の多く住むチットランジャン・パークの私宅で、およそ一時間あまりの時を過ごすことになった。国会の会期中で、アポイメントメントは取ったものの、何度も約束の時間と場所を変更させられた。もう駄目だろうと諦めそうになった夜半に電話を入れると、今なら会えるからすぐ来てくれ、という返事をもらい、後輩と一緒に駆けつけた。後から振り返ると、そうした会い方は、暗殺者から身を守るためにけっして居所を明らかにしないという、彼女の防衛的な日常行動だったと思われる。けれども、一日の終わりの、夕食前のリラククスした家族団欒の時間に、しかも自宅の居間で会ってくれたことは、大変に貴重な経験だった。とはいえ、そのときには、プーランとの面接の価値を十分には理解できていなかった。その後、彼女が基本的にインタビューを拒否しているとジャーナリストの人々に繰り返し教えられて、改めて自分の幸運を思い知らされた。⁽¹³⁾

プーランは——そして後に出会った村に住んでいた彼女の母親も——ジャーナリストを心の底から嫌っていた。人生の大半、国内や国外のメディアに追い回され、プライベートシーを無視した一種の見せ物にされ、訴訟や政争ともなれば極悪非道な人殺しとして糾弾され、本人からすれば歪められた「盗賊の女王」の物語をでっち上げられてきたためである。母親の言葉を引けば、報道記事や本や映画が発表された後、金を儲けて得をしたのは、プーラン

や彼女の家族ではなかったからである。筆者が面会を許されたのは、おそらく日本から来たということと、大学の教師だということを電話で何度も伝えたからかもしれない。プーラン自身が、自分の自伝が日本語に訳され、立命館大学に招かれた経験を、とても名誉に思っていると嬉しそうに語っていた。日本で招いた方々も彼女に会った人々も、ただ親切だっただけでなく、対等な一人の人間として、しかも尊敬の念をもってプーランを迎えられたのだろう。カーストやジェンダーを理由に差別され、無学の者として扱われ、犯罪者として罰せられてきた彼女にとっては、食卓と一緒にお茶を飲んで食事をしてもらうことだけでも価値のあることだったに違いないからである。また、インタビューの際に同席して時折英語で通訳もしてくれた、彼女の養子にした青年がデリー大学の学生だということ誇りにしていたから、大学で教えている私の職業に興味を持ってくれたのかもしれない。⁽¹⁴⁾

それなりに受け入れてもらったからか、翌年の三月にも再びプーランに面接することができた。ただし、このときは住居を国会議員の公邸のあるアショカ通りに移していて、面会の約束は、サマディワディ党の古強者らしい秘書を通してのみ可能だった。事務所の応接室では、この秘書が大きな机を前に主人のように座り、プーランはまるで彼の下で働かされ、客の相手をさせられているようだった。このときも議会では予算案を審議中で、暗殺された日と同じように、彼女が国会から昼休みで公邸に帰宅したときに出会った。共産党の古い幹部であった国会議員が死亡して、そのお葬式に行くと言っていた。印象的だったのは、彼女が身体の不調を訴えていて、国会に通うのもつらくて医者にかかっているという話と、常に身辺に危険を感じているけれども中央政府は警備をつけてくれない、中央政府だけでなくウツタル・プラデーシウ州でも警察や役人はプーランを馬鹿にして取り合ってくれない、やはり未だに差別されている、という不満の話だった。このときようやく、チットランジャン・パークの自宅にいた獐猛そうな黒い大型犬は、警備のために飼われていたのだろうと悟った。

彼女の信条や主張は本稿の後半部分で紹介するとして、短いインタビューの間の事務所の風景を伝えておきた



写真1 国会議員となったプーラン・デーヴィー (ニューデリー議員宿舎, 2001年3月, 著者撮影)

い。党の秘書が監督していたので、政治的な問題については、サマディワディ党首ムラヤム・シン・ヤーダヴは偉いという話と、党の公式の政策表明のような話しか聞くことはできなかったが、事務所にはけっこう人が訪ねてきていて、政治家としてのプーランの姿を見ることができた。アッサム州から来た大学の教師は、これからムラヤム・シン・ヤーダヴに頼ってサマディワディ党から立候補しようと思っていることと、三月八日の国際女性の日にはプーラン・デーヴィーにアッサムに来て講演をしてもらいたいということを、元氣よく説明していた。プーランは耳を傾けて、少しづつ口を挟んでいた。小さな子どもを連れてビハール州からデリーに來たが夫に捨てられたという若い女性は、地元に戻るお金がないから助けてほしい、と訴えていた。プーランは、いつも政治家のところを回っているばかりではなくて自分の力で働きなさい、と懇々と説教していた。

また、彼女の回りにいて何かしら仕事をもらって暮らしているらしい、地元から來た中年の男たちもいた。チットランジャン・パークの階下の事務所であつた人たちもいた。最初はプーランと血が繋がっているか、公的な役

ある人たちかと思つたが、そうではなく、親戚でもないし、党の人でもない。単純に、仕事とお金を持っていくプーランの側にたむろして、電話番号をしたり、彼女を訪ねてくる私のような人間に関わったりして、彼女の回りで生計を立てている人たちだつた。そして、党の秘書は、部屋の中の人々の話(15)に聞き耳を立て、有力者風に全体を仕切ろうとしていた。

私は、こうした風景そのものが不思議であるだ

けでなく、プーラン・デーヴィーという人の人生の縮図だと思った。彼女は、貧しさと暴力にも打ち負かされず、自分の才能と努力だけを頼りに、直観的に道を選び運命を切り開いてきた。しかも、周囲にはいつも弟や妹や母親、盗賊の仲間だけでなく、彼女を頼る人々を数多く抱えて面倒を見てきた——そういう人間関係の縮図である。十代初めの幼い少女だったときにも、家族の貧しさを背負って自分たちをいじめる親戚の叔父と戦ったし、盗賊時代には、男たちを引き連れて強盗をしながら、他方では家族や貧しい村人を経済的に支援した。政治家になった後は、選挙区や自分の地元の人々、それ以外にも相談や助けを求めて来る人々の話を聞き、助言をし、助力を惜しまない。年齢と肉体的な傷みに苦しんでいる更年期の女性だとしても、そうした強烈で責任の重い生き様に疲れているように感じたのは、気のせいだろうか。

こうして、まさに盗賊となって出世したとも言える、数奇な人生を辿ったプーランに再会した後、彼女の村を訪ねようと思い立った。私が彼女の村に行きたいというと、ウツタル・プラデーシユ州東部でヴァラーナシーに近い「ミルザプールの選挙区がいいか、それとも私の生まれた村がいいか」と聞いてくれたので、ぜひ彼女の村に行き、できれば自伝にも書かれていたお母さんに会いたいと答えた。彼女は喜んで、もちろん母は村にいるから、と答えた。だいたいの行き方と村の場所を聞いて日程を打ち合わせると、党の秘書をしていた人物が、「大丈夫、大丈夫。彼女の家は豪邸で、もう連絡を入れたから、何日泊まっても大丈夫だ」と簡単に請け合ってくれた。調子良すぎる話だったが、その場では彼の言葉を信じるしかない。こうして、数日後には通訳の女性と二人で出発した。列車でデリーから近隣の大きな工業都市カンプールに向かい、そこから知り合いを辿ってタクシーで数時間移動し、途中の町でこの地区の昔の行政官で退職した有力者やひどく怪しいヒンドゥー僧も同乗させながら、彼女の村に向かった。地図にも載っていない道である。彼女の村に着くと、先日の秘書の話しはでたらめだとわかった。プーランの母親と妹の家族はいまだに泥の家に住んでいて、電話などないし、連絡が付いているわけがなかったからである。

こうしてウツタル・プラデーシュ州の貧しい村にある彼女の村を訪ねた。プーランが「盗賊の女王」という名を馳せたチャンバル溪谷から遠くない、ガンジス川が別れたジャムナ川に面した村であった。次に、盗賊の出る地域とはどのようなところか、チャンバル溪谷という場所を説明しておこう。

第二節 盗賊の土地——チャンバル溪谷

「溪谷 (valley)」とか「峡谷 (ravine)」という言葉を付けて呼ばれるチャンバル (Chambal) 地方は、北インドの中央にある三つの州——ウツタル・プラデーシュ州、マディヤ・プラデーシュ州、ラージャスターン州——にまたがる乾燥した地域に広がり、ガンジス川から別れたジャムナ川やチャンバル川などの支流が走っている。

どういふ地域かを表すために、ここではとりあえず、国家や社会の「中心 (center)」的な機能を果たすところではないという意味で「辺境 (periphery)」という言葉を使いたいと思う。それは、空間的に国家や社会の「周縁的な (marginal)」領域というだけではなく、本質的に、そこに住む人々の暮らしに起こっていることが、国家や社会の中では重要な意味を与えられず、ほとんど無視され切り捨てられているような領域である。したがって「中央」と「辺境」の間には次のような関係性がある。つまり、中心的な社会に暮らす人々にとって支障がなければ、辺境地帯でどんなに暴力的な事態が起こってもほとんど認識されないが、中心部の人々に危害が加えられるようなことがあれば、何とか対処しなければならぬ「問題」として関心を向けられることになる——こうした非対称でありながら両者が結びついている関係性である。その基礎に格差構造がある¹⁶⁾。

さて、チャンバル溪谷には、砂漠や低木の茂み程度しか生えていないような乾燥した荒地が広がっている。降雨量は少なく、夏は摂氏五〇度を越えうだるような暑さで、冬は大陸性の冷え込み方をする、寒暖の差の激しい、自然の厳しい土地である。ガンジス川から分かれたジャムナ川やチャンバル川が近くを流れているが、灌漑などの



写真2 プーラン・デーヴィーの故郷の村の周辺と村へ入る道
(2001年3月、著者撮影)

インフラストラクチャーの整備はほとんど進んでおらず、農業的には生産力が乏しい。現在でも村と村の間は、使われようのない土地が荒涼と広がり、人々の暮らしは平均して貧しい。舗装されていない土の道の上を、燃料となる枯れ木を束にして頭の上に載せた女性が歩いていき、水牛バツファロの引く車が干し草を運ぶようなところである。高校生の少年が走らせる自転車すら、近代的で高価な新しい品物に見える。

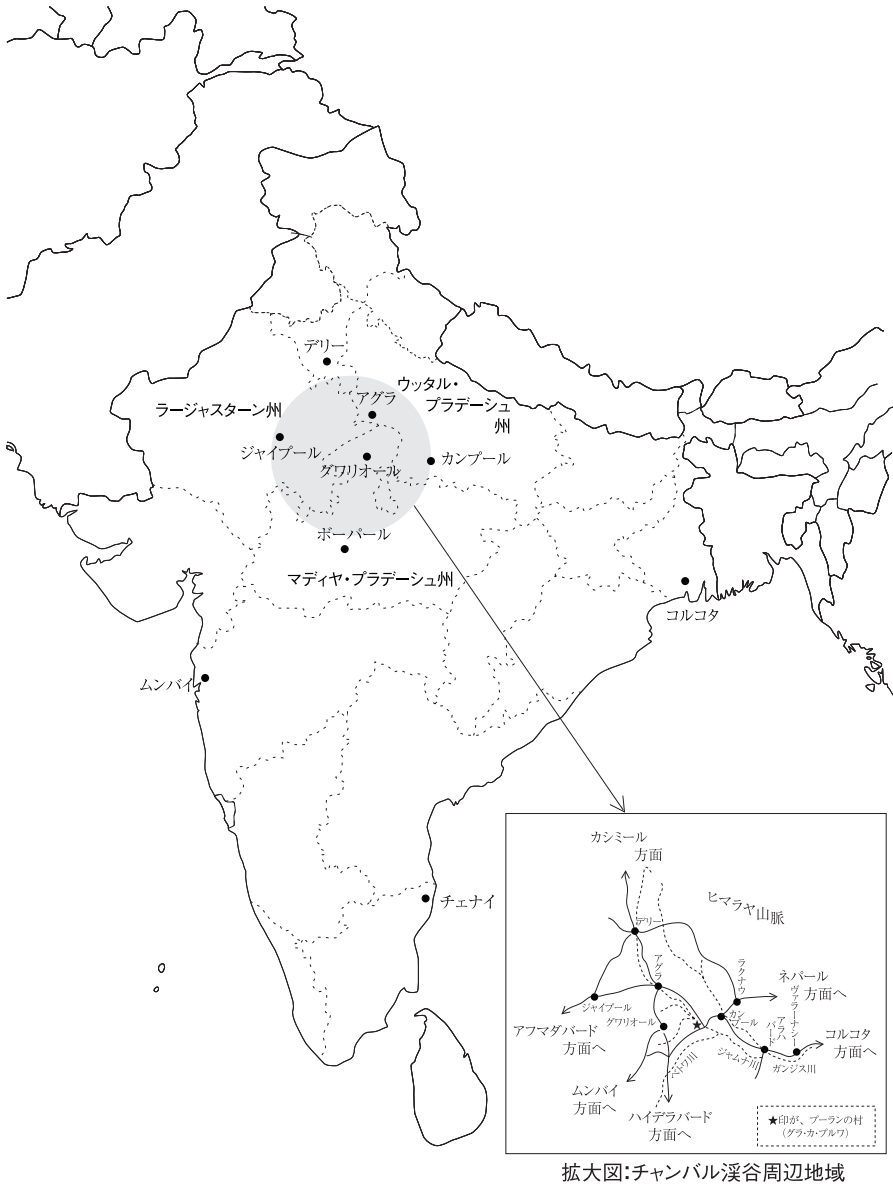
こうしたチャンバル渓谷は、もともと「辺境」となるような自然の条件を備えていた、と考えるほうがわかりやすそうではある。偶然でもないのだが、インドの盗賊が出没する地域は、トラ・ヒョウ・ジャツカルなどの野獣や天然記念物の野鳥が生息する森林や灌木地帯で、国立の自然公園と重なっているところが多い。⁽¹⁷⁾チャンバル地域もそうで、昔から土着の王族としてのマハラージャやヨーロッパ人の狩り場として使われ、現在では役人に賄賂を送って密猟する者が絶えないが、それとともに古代以来の遺跡も数多く残っている。国家や市場の中心からも近く、首都デリーからは車で六時間程度の距離で、アグラやジャイプールといった観光客を引き付ける古都、あるいは仕事で人々を集める政治行政の中心地や人口の密集した工業都市も近隣に存在している。イギリスの統治した時代から東西南北を結ぶ鉄道が建設され、列車の本数は際だつて多い。旧来の幹線だけでなく、一九九〇年代には道路が拡充・舗装され、鉄道以上に短時間に物資と人の輸

送手段となっている。つまり、この地域は、人や物や金や情報の行き交う幹線の間位置している。

したがって、チャンバル渓谷を囲む地域は、通常発想されるような「辺境」ではない。盗賊地帯のすぐ横にある幹線道路の交差点は一日中渋滞していて、排気ガスが充満している。道路沿いには、ガソリンスタンドが新設され、長距離電話もかけられる食堂があり、テレビも映っている。工業製品を山のように積載した大型トラックや大勢の労働者を荷台に載せたトラックが数珠繋ぎになっている。けれども、この広い舗装道路の横に、背の高い樹木が並び、そこから向こうは別の世界が広がっている。日が暮れた後は、電灯のついた明るい世界と漆黒の闇の世界の差となって、その間の境界線がひしひしと感じられる。明暗の違いは、舗装された幹線道路と泥の村道の差とも重なる。幹線道路から一歩横に道を入ると、それなりに幅のある道もあるが、地元の人が歩いて通るかせいぜい自転車やオートバイしか通れないような幅の狭い道となる。デリーやアグラやナーグプルという複数の「中心」との間を行き来する人々は、この、閉鎖された「辺境」の世界にはけっして足を踏み入れずに、ただスピードをあげ、排気ガスだけを残して通り過ぎていく。

こうして、アメリカやヨーロッパと同時進行して生産や消費を行う経済網が展開されている世界のすぐ隣に、その動きに巻き込まれて大きく変貌しながらも、貧しさの中に取り残された地域が横たわっている。このように、二世紀のグローバリゼーションの時代にも新しい形で再編された「辺境」が、チャンバル渓谷なのである。

さて、チャンバル渓谷周辺の地域が、人・物・金・情報が動く幹線の脇に広がる「辺境」だという性格は、何も今始まったものではない。イギリスの植民地支配が始まるよりもずっと前から、こうした性格の土地としての歴史を辿ってきた。紀元前六世紀のナンダ朝衰退後には、部族や他の集団の暴力的な対立が始まったとされ、『マハーバーラタ (Mahabharata)』や古い伝承の民話などには、徒歩で旅行する人々を襲う盗賊として *dasyus* という記述があるという。一二世紀には以下のように歴史記述にも現れる。デリーのトマール朝のアナンダパール王が、従弟の



地図1 ブーラン・デーヴィーの故郷とチャンバル渓谷 (著者作成)

プリトヴィラージ・チョーハンに追われ、チャンバル盆地に逃げ込み、そこを根拠地として何度もデリーに攻め込もうとした。しかし、プリトヴィラージを倒したムスリムのサルタナット朝によって、その野望は断たれることになった。⁽¹⁸⁾

こうしてインドの中世ともいうべきムスリムの支配時代が始まると、ラージプート (Rajputs) と呼称されたデリー周辺のヒンドゥー諸王族はチャンバル溪谷に逃げ込み、ドールプル (Dholpur)、エタワール (Etawah)、グワリール (Gwalior) といった王国を形成した。ラージプート族との血縁関係を主張するグジャール (Gujars) という武装部族も、ここに根拠地を築いた。前頁のチャンバル地方の地図にも、こうした諸王族や部族の名前が、現代の行政区画の名称として残っている。ムガール帝国は、これらの武装諸族によって悩まされ、それゆえに政都をアグラからデリーに移したほどであった。厳戒体制を敷いても輸送中の金品が盗まれることは珍しくなく、ボンベイ (現代のムンバイ) とアグラを結ぶ街道沿いには、宿泊用のシェルターや要塞を点在させた多数の道路が建設された。したがって、歴代のムガール皇帝は、こうした人々を敵に回さず、かえって味方として取り込むための政策を展開したのであった。⁽¹⁹⁾

一八世紀になると、ムガール帝国の勢力が衰え、それに応じて西インドから台頭したマラータ王国が、亜大陸の中央部から北に向けて進出を始めた。まずグワリール王国の地を獲得して勢力を拡大したものの、新しい勢力に対してもラージプートやグジャールといった地元の武装勢力の「抵抗 (batti)」は止むことがなかった。マラータと競い合って東のベンガル地方から影響力を伸ばしていたのがイギリス東インド会社だったが、会社の派遣した総督ウオーレン・ヘースティングスは、グワリール地方を「インドスタン (インド人の国) の湾」と形容し、デリーからデカン高原へと南下するための重要な戦略的な通路として確保しなければならぬと主張していた。一九世紀初頭には、マラータ王国という強力な現地勢力を敗北させて、イギリスがこの地方に本格的に進出を行ったが、

そのため逆にこの地域の伝統的な無秩序状態に対処しなければならなかった。「ピンダーリー (pindaris)」と呼ばれる武装勢力や「タギー (thugs)」という殺人強盗団が跋扈し、「ダコイト」と呼ばれた盗賊も頻繁に出没したため、本国政府も乗り出して本格的な掃討作戦が展開された。これらについては、第二章で考察したい。

以上からわかるのは、チャンバル溪谷は、紀元前から続いている「悪所」あるいは「邪悪な土地」と呼ばれる badland だと言えそうな場所だということである。「山あり、溪谷あり、森あり、という特殊な地理的な特徴によって」、ここを根城とする武装勢力は「ゲリラ戦のエキスパートとなっていて、敵が体制を立て直す前に攻撃し殲滅してしまうことに長けていた」、という⁽²⁰⁾。したがって、亜大陸に統一的な秩序を築こうとした代々の帝国にとつては、首都や主な街道に近接していながら、けっして制圧できない、権力の限界を示す地域、この論文の初めに述べた概念を使えば、合法の世界の向こう側の世界だったと言えるだろう。以下に述べるようなプーラン・デーヴィーの「犯罪」活動もまた、独立インドにおける国家的な秩序の限界を明らかに示すものだった。

第三節 盗賊現象の分析

プーラン・デーヴィーの活動した一九八〇年前後は、ダコイトが人々の関心を集めるだけでなく、治安政策を構想する上で調査分析しなければならない対象となっていた。したがって、学術的な研究書はほとんどないかわりに、警察組織の官僚によって書かれた研究書が若干残されている。「ダコイト問題は我が国にとっては新しいものではないが、最近、警察機構が利用できる技術的な進展とは比べものにならないくらいに、急速に拡大している」からであった。ここでは、それらの資料をもとに、中央インドに何世紀も展開してきた「組織暴力と組織犯罪の社会学的分析」として、政府の側が「開放刑務所 (open prisons)」に服役中のダコイトにインタビュー調査を行って収集したデータについて、その内容を紹介しよう。

「ほとんどのダコイトは、マディヤ・プラデーシュ州のチャンバルおよびブデルカンド地域に属している。平均的にビンド県が、この二つの地域の中では、三九%のダコイトを生み、もっとも大きな割合を占めている。ブデルカンド地域の中では、チャットルプル県が一七%でもっとも割合が高い。すべてのダコイトは、農村の出身である」。そして、季節的にダコイトをしている者もいれば、季節と関係なくダコイトになっている者もいる。多くのダコイトは、一五年以下の経験しかなく、調査の対象となった一〇〇名のうち、三四名が五年以下、三一人が一〇年以下、二二名が一五年以下で、それ以上の者は一一名しかない。したがって、ダコイトは平均的に若いと思われるのだが、そうでもなく、一〇代の青年層よりも壮年層が主体である。二〇―三〇代が二四名、三〇―四〇代が四〇名、四〇―五〇代が二二名であり、最年長の七〇代を頭に、五〇代以上も一四名いる。平均年齢は、チャンバル地域で三六・四三歳、ブデルカンドで三七・四一歳である。⁽²¹⁾

経歴としては、「ダコイトは主に耕作の民である。商業階級からダコイトになった者はいない。しかも、興味深いことに、もっとも貧しい農民ではなくて、土地を所有している耕作民が一〇〇名のうち五二名を占める。所有者で小作農が一三名である。耕作農でジャジマニー (Jaimani) とは村落内のカーストに基づく伝統的な分業制度) の労働をする者は八名である。それと農業労働者を兼ねる者が二四名である。しかし、土地所有者とはいつてもその規模はかなり小さく、五エーカー以下が四〇名、五―一〇が六名、一〇―一五が一七名、一五―二〇が九名である。伝統的にはダコイトは合同家族 (joint family, 大家族 extended family) ともいうが、年長男性を中心に男系の複数の家族がかまごと土地をともして暮らす大家族制を指す) の出自だったが、最近では、六五%がむしろ核家族化している」。⁽²²⁾

ジェンダーの視点から見ると、サンプルとなったダコイトはすべて男性である。例外を除いて、女性はあまりダコイトにならない。けれども、「男性のダコイトがふつう高いカーストの出身であるのに対して、女性は、低い社

会経済的階層からの出身で、しかも不幸な結婚の歴史を負っていることが多い。ヒンドゥーの高いカーストにおいては性的な禁忌が厳しく、それも高カーストの女性が犯罪に手を染めるのを引き止めているのかもしれない。結婚について見ると、農村地域の幼児婚 (child marriage) とは、まだ子どものうちに結婚させる慣習) の慣習を反映して、五四%のダコイトが犯罪者になる前に結婚している。二―三人の妻をめぐっている者もあり、ダコイトとしての活動に彼女たちを連れてくる者もあり、また一夫一婦制を守っている者もいる。⁽²³⁾

カースト的には、伝統的に騎士階級 (クシャトリア) に属すラージプット族が最も多いが、必ずしも集中はしていない。高カーストで僧侶階級とされているブラーフマンからもかなりの割合でダコイトが生まれている。また、ラージプットと同じように、戦闘的なカーストの歴史を誇るグジャールも多い。要するに、カースト的には、むしろ高い農民カーストのほうがダコイトになりやすいのである。この点は、大変興味深いだろう。社会の最も下層の人々が盗賊になっているというよりも、上層に位置するとされる者からダコイトが出てくるのである。⁽²⁴⁾ こうした人々の中で、軍隊や警察に勤めた者が村に戻った後、ダコイトになる事例も少なくない。

逆に、低いカーストの人々や部族と呼ばれる人々、また次章で検討する「犯罪部族 (criminal tribes)」と植民地時代に指定された社会的に最も下層の人々も、ダコイトには少ない。したがって、社会的に最底辺に置かれている集団が盗賊を出している、というのは誤った先入観だということになる。低カーストでも、ことに耕作農のカーストとしての力を持つクールミー、アヒール、ヤーダヴなどが、むしろ弱小のカーストよりもダコイトを輩出している。チャマールのようなかつてのアウトカースト出身者は、目立っていない。しかし、カーストを横断して言えることは、教育程度はきわめて低く、学校に行った年数が数年以下という人がほとんどであり、六割以上が満足な識字教育を受けていないという点である。したがって、制度的な組織における就労機会は得にくい人々であり、ブラーフマンやラージプットにも同様な状況が見られる。⁽²⁵⁾

インド社会の貧富の格差や階級的抑圧が制度化されたものとして、カースト制度が指摘されるのはもつともなだが、必ずしもカースト的な抑圧やカースト間の対立ゆえにダコイトになった者は多くない。「カースト社会の特徴は一定の形でダコイトのシステムに取り入れられているのだけれども、カーストそのものがダコイトを生むわけではない」。それは、カーストというような血縁一族全体の利益やアイデンティティを問うような、比較的大きな集団同士の対立ではなくて、むしろ同じ村の中の身内や隣人との利益対立や権力闘争が原因となっているからである。ほとんどの者は、「自分のカーストや血縁集団の中の喧嘩・闘争・不和のために」ダコイトになっている。⁽²⁶⁾

さらに、ダコイト集団それ自体は、必ずしも特定のカーストや血縁集団に属していない。さまざまな出自を持つ者が、状況や人間関係によって手をつなぎ、盗賊団を組んでいる。盗賊集団間の離合集散や合従連衡もあり、武装闘争まで行って激しく対立する場合もある。したがって、ダコイト集団それ自体は、あるカーストだけで固まっただけではないものの、その集団の首領が誰であるかは、行動の行く末に決定的な違いをもたらす。そのような意味で言えば、長いダコイトの歴史においては、ブラーフマンやラージプート、あるいはグジャール出身の人物が首領として指導力を握ることが一般的であった。そして、ダコイト集団の中のカースト秩序が編成されて、指導的な地位は上位カーストの出身者が占め、下端のダコイトや洗濯・料理・情報収集などの下働きをする仲間は、下位カーストの人々があたっていた。

けれども、武装闘争や犯罪行動を行う集団なので、身分よりも実力が個人の評価を決める要素ともなる。だが、実力といっても、個人的な評価の中には、盗賊団を保護する力を持つ村の有力者や家族を背景にしているなど、カースト身分や出身の家の優勢さ・富裕さも含まれる。「逆説的ではあるが、ダコイトになった途端に、自分のカーストや血縁集団に維持され助けられるという構図が生まれる」⁽²⁷⁾からである。けれども、実戦部隊としては、組織力・決断力・攻撃力といった各自の資質の優秀さによって仲間の信頼を得るということは十分にある。プーラン・

デーヴィーの頃から、新しい現象として、身分は低いいけれども、盗賊集団の中での優秀さによって首領となるようなダコイトがめだつて登場してきたのであった。

けれども、こうした「下克上」型のダコイトの場合には、ダコイト集団がカースト横断的であることは、かえって組織力を弱める可能性も生む。たとえば、ブラーフマンやラージプートのダコイトは身分の低い首領には従属したがらないという現象が見られ、それが理由になって組織が分裂させられ、手下が警察や他のダコイト集団と組んで首領を殺害して組織を乗っ取るといった行動も起こりえる。したがって、むしろダコイト集団におけるカースト秩序が緩んでくると、逆に、同じカースト、あるいは近接するカースト集団出身のメンバーによって組織を作ろうという動きが強まるきっかけになる。ことに、ダコイトになった新米について初歩的な訓練や忠誠心の訓練が課されるときには、カースト的な連帯感が重視される。苛酷な対立競争の中で誰が信じられるかと言えば、同郷で同カーストのメンバーだからである。

「なぜダコイトになったのか」という質問に対する答えを分類すると、第一の理由は、土地やその他の所有権争い、第二は村の中の派閥争い、第三に権力を持つ強者による弾圧、第四は苛酷な労働を強いるような貧困状況、第五はダコイトとのつきあい、第六は警察の抑圧などとされる。警察文書に記録されている個々のダコイトの経歴を見ると、これらの理由が固有に組み合わさって、ダコイトになったことが理解できる。皮肉にも、多くの者が、「警察にダコイトだと指名手配されたからダコイトにならざるをえなかった」と答えている。対ダコイト作戦のために設けられた‘military’などと通称される特殊部隊 (Special Armed Force : S A F) ではなく、通常の県警察 (District Executive Force : D E F) の評判はさわめて悪い。だから、かなり一般的に、村人には、「腐敗した警察こそがダコイトを生んでいる」という認識が抱かれている。

たとえば、村の中で対立する勢力の一方が相手方を貶めるために、相手が盗賊行為を侵したと警察に通報し、警

察に「敵」を逮捕させようとするのが頻繁に起こる。要するに、政争や利益争いの道具として使われるという実態がある。また、警察が賄賂や女性との肉体関係などを不当に要求して、それを叶えるために盗賊として逮捕するという事例もある。逮捕の過程や留置されている間の女性に対する強姦は、地元の警察という密室の中で行われやすい。あるいは、地元の有力者や彼らと手を結ぶ警察関係者にとつて都合の悪い個人を、ダコイトとして逮捕させてしまう。とくに、裁判で有力者に不利な証言を堂々と言うとか、明らかに警察に逆らったりすると、そうした憂き目に会うことが多い。ひどい場合には、政府のダコイト掃討作戦の逮捕目標を達成する必要に迫られて、単純に数を満たすために無実の人を逮捕したりすることもある。逆に、地元警察がダコイトと協力し、盗賊行為の分け前を要求し、その代わりに特定の集団に保護・情報・武器などを融通することは珍しくない。⁽²⁸⁾

こうして、警察という国家の暴力機構を間に挟んだ農村社会の対立は、警察の協力者、あるいは警察を抱き込む村の有力者と、それらと敵対する側との暴力的な対立を招く。「チャンバル渓谷では、だいたい二〇〇から四〇〇のダコイトが常に活動しているのだが、毎年一〇〇人以上を警察が殺害したり逮捕したりしているのに、一向に減らないという統計がある」。なぜなら、警察に「遭遇」して惨殺されたダコイトの兄弟・親戚・友人仲間は、警察に情報を流した輩に復讐した後、新しいダコイトとして森に逃げていくからである。いいかえれば、ダコイトを増やすような連鎖のしくみが存在している。「チャンバルは、確かに憎しみと絶え間ない復讐の土地である」。⁽²⁹⁾

農村社会の通常の生活を逸脱する理由と経歴があるからこそ、「無法者」となるのだが、「無法者」の世界が農村社会のあり方と断絶しているかという点、そうではない。むしろ事態は逆で、「無法者」になった途端、合法的な社会とのつながりはさわめて重要になり、合法的な社会の必要を満たしながら、「無法者」としての世界を維持することになる。それをさらに裏返せば、合法的とされている社会のほうは、「無法者」の存在を必要とするような構造を持っていて、政治・経済・社会的な利益を獲得し、身の安全や財産を保護するために、「無法者」の暴力と

脅しを利用するのである。

また、ラージプートやグジャーラが戦国時代に誇った歴史は、武器を保有するカーストの伝統や土地を買わずに武器を買う気風として、今なお美化されて伝えられている。それらは、たとえば「戦士の文化」と言うことができるだろう。それが「無法者」の世界に引き継がれ、「義賊 (*baghi*) の文化」として民衆的に支持され、そうした枠組みの中で「盗賊の文化」が絶え間なく維持されている。

以下では、一人のダコイトの歴史として、プーラン・デーヴィーの誕生までの軌跡を辿ってみよう。

第四節 プーランの生涯

ごくありきたりの盗賊や強盗なら、逮捕された後に、警察・司法の文書に取り調べ関係の情報が記録されるのがせいぜいである。こうして最低限の記録が残され、刑が科せられ、その後は、記録自体の保管も危うく、誰かが後にその記録を読むことさえないだろう。多くのダコイトの場合には、逮捕や投降以前に、警察や特殊部隊との「遭遇」によって銃撃戦の最中に殺害されて一生を閉じてしまう。死体が転がっていても、それがどこの誰だったかもわからないまま、つまり当たり前の死亡記録さえないままに死んでしまう犯人もいる。

一昔前の「義賊」であれば、地元の人々が民謡に歌い、さまざまな物語として周囲に語り伝え、そうした噂や口話が定着し、さらに口承説話となったかもしれないが、具体的な事実はそれほど長く人々の記憶に止められるものではない。ホブズボームが書いているように、新聞・雑誌・著作という印刷され広く読まれるものに書かれて初めて、そうした話が時代を超えて伝えられることになった。イギリスの義賊として有名なロビン・フッドでさえ、多くの人格やエピソードの寄せ集めの伝説だと言われる。したがって、ダコイトとは、他の力を持たない民衆とともに、名前も記録されず、人々にも憶えられず、歴史の闇の中に消えていった人々でもある。

けれども、プーランの生い立ちは、自伝をはじめ、何冊もの伝記、それを映画化した作品、メディアの報道によってかなりよく知られている。貧しい社会の底辺に生まれ、権力・富・身分と無縁な育ち方をした人物としては、このような形でその歴史が公的に語られること自体が非常に稀である。しかも、男性ばかりだった盗賊の中で女性であった点でもめずらしい存在であった。彼女については、毀誉褒貶もあり、不明な点や矛盾した点も多いが、それでも、一人の少女が盗賊になり、しかも「盗賊の女王」と呼ばれるようになったという物語には多くの人々が惹き付けられてきた。⁽³⁰⁾

以下では、彼女の人生の物語をかいつまんで紹介してみよう。農村の一人の小さな少女をジャングルに逃げ込ませ、重い銃を構えて人を殺す盗賊の生き方を送ろうと思ひ詰めさせるような「暴力の構造」とはどのようなものだったのか。そこには、子どもがなぜ「暴力の連鎖」の主体に変わっていったのか、という問題も孕まれている。

1 没落した農家

プーランは、ウツタル・プラデーシュ州ジャロン県にあり、ガンジス川から別れてデリーに向かうジャムナ川に面したグラ・カ・プルワ (Gurha Ka Purwa) という村で、漁民カーストの一族マッラー (Mallan) の家に生まれた。彼女の家も川のすぐ側にある。一九五七年生まれとも、それより数年遅い一九六一年とも言われるが、いつ生まれたかの正確な年月日の記録はなく、家族にもさちんとした記憶はない。明確なのは、彼女の上にはルクミニという姉がおり、プーランの下には二人の妹と弟シヴ・ナーラーヤンがいたということである。

父親デーヴィーディーンは、まじめで優しいが、不器用で臆病な質の農民だった。読み書きが出来ず、家業を営展させる才能もなかった。プーランの不幸は、この父親が十分な土地を所有できなかったことに始まる、といずれの伝記も記している。プーランの祖父にあたる人物が所有していた土地は、何事もなければデーヴィーディーンと弟

のビハーリーの二人が分けて相続するはずだったが、農民として経営の才があつて教育もある弟が兄を出し抜いて独り占めしてしまった。彼は町の役所に行つて土地の登記を行い、すべての土地を自分の所有地として申告した。

ある日、プーランもすでに物心付いている頃、叔父のビハーリーは村中が聞こえるようにデーヴィーディーンに向かつて、「おまえの母親は、おまえの手を引つ張りながら親父の家に嫁いできたのさ」と怒鳴つたという。だから、私生児で父親の正当な子どもではないデーヴィーディーンには土地の所有権はない、という論理である。このように、兄弟とは言つても、母親は違い、ビハーリーの母親のほうに家族の中でより正当で優勢な権力があつたと推測されるが、こうした話からも、一夫多妻制や子どもとの血統についての複雑な家族関係が、土地をめぐる争いの背景にあつたことが伺われる。ビハーリーの息子でプーランの従兄弟にあたるマヤーディーンという人物もタフで業突張りだったらしく、父親の土地は自分の所有だと主張し、デーヴィーディーンには所有権がないのに、不当にマヤーディーンの土地から作物を盗んでいると責め立て、暴力的な嫌がらせを行つた。⁽³¹⁾

農民には「土地 (zamin)」が生活すべての基本だと言われる。プーランがなぜ盗賊になつたのかを理解する上では、繰り返しの原点に立ち返る必要があるだろう。土地が生産のすべての基礎をなすような農民の世界で、土地があるかないかは、人生と日々の暮らしを変える。所有地を耕した後の収穫物は自分のものである。収穫物から借金支払いが差し引きされるとしても、収穫物を商品として売るにせよ、自分の家で食すにせよ、自分のものである。しかし、自分の土地がなければ、他人の土地で農作業の労働者として働いて収入を稼ぐしかない。こうして地主に従属的な雇用関係が生まれる。十分な農耕道具も与えられずに厳しい労働を課せられても文句は言えないし、正規の請負契約など取り交わしていないから、報酬が妥当な額だけ支払われるかどうかも地主次第である。何日も働いた挙げ句に、賃金も作物も支払われないことが多々ある。強制的なただ働きである。結局、人を使えるほど十分な土地を持つ農民は「地主」であり、そうでない者は水呑百姓になってしまう。

兄弟の土地争いで勝ったプーランの父の弟は、マッラーという底辺のカーストの生まれでも、かなりな広さの土地を保有することで、自分の村で一角の人物になった。プーランの言葉によれば、「溪谷地帯の上を旋回する鷹のような風貌の持ち主」の彼は、まるで上層の地主カーストである「タークルであるかのように振る舞っていた」。要するに、「土地を所有していながら自分は手を汚して土地を耕すことは夢にも考えないような、権力を持つ重要人物」として、暮らしていたのである。しかし、プーランは、「彼は金持ちだから、まるでタークルと同じように力を持っていると考えていたけれども、結局は私たちと同じマッラーにすぎなかった」と、自伝で回想している⁽³²⁾。けれども反対に、プーランの父の家族は、村の中で最も貧しい階層に貶められていった。マージャーディーンとプーランの父親は「伯父」「甥」の関係であったにもかかわらず、マージャーディーンは伯父に対して、まるで地主が土地無し農民に行う「追い立て (eviction)」のような扱いを続けたと言えるだろう。

以上の話は、土地所有制度と資本主義的な階級関係が農村に変化をもたらす過程で、一世代の間に貧富の大きな差が生まれるという、何千万もある事例の一つにすぎない。

ある日、父は私にこう言った。「ビハーリーさんを敬わなくてはいけないよ。あの人はおまえの叔父さんだから」と。私は父の言葉が信じられなかった。あんなに金持ちの人が叔父さんだなんて。召使いが居て、コンクリートで出来た何階建ての家を持っている人が。本当の叔父さんなら、私たちを助けようとしてくれるはずでしょう。殴ったり侮ったりするのではなくて！ ビハーリーは私たちを軽蔑していた。小さいとき、何も着ないで走り回っていた私と妹を、いつも鼻でせせら笑っていた。「この子たちを見ろよ、裸だぞ」と私の母に怒鳴っていた。「無様だ」と。彼は村中に、「いつも問題を起こすのはこの家族だ」と言いふらしていた。⁽³³⁾

国家と市場経済の影響が農村を不断に変えていった二〇世紀のインドでは、一世代間の浮き沈みは珍しい話ではなかった。少し前まで人類学者や宗教学者が必ず指摘したのは、インド社会における「合同家族」の存在だった。つまり、カーストと結びつきながら男系の世襲によって維持される血縁的な集団が、社会的秩序とともに扶養のしくみとして機能する伝統的な組織である。しかし、プーランの話は、こうした「合同家族」が機能しないばかりか、同じ家族の中から土地所有をめぐる分裂と対立が引き起こされて、一方が止めどもなく没落していく様を描いている。それは、お父さんに才覚と運があるかどうかで、一つの家族にとつて天国と地獄が分けられてしまうような、競争の時代が到来したことを意味している。村の親類は、昔のように簡単には助けてくれない。そればかりか、土地の細分化を促進する法制度の下で、狭い土地の所有権を争うライヴァルとなり、血のつながりのない他人以上に弱者を残酷に虐める側に回ってしまう。

けれども、人の良いデーヴィーデーインすら、簡単には土地を諦めず、権利回復を求めて訴訟を起こした。「大工仕事をして稼いだお金をすべて裁判所に行く費用につき込んで」、近くの町カルピ (Kalpi) の裁判所に通った。その結果、デーヴィーデーインが一旦勝訴するのである。そのときには家族一同が喜び、「神様たちの像の足下に花輪を備えにお寺に詣った」という。しかし、ビハーリーは直ちに上位の裁判所——もっと遠くの町オーライ (Orai) の裁判所——に訴えを起こしてしまい、結局土地については何も変化が起こらなかった。それからの日々、プーランの「父は一日をかけてオーライの裁判所まで歩いていき、すぐがっかりして戻ってきた。ため息をついて、新しい弁護士を雇うためにはまたお金を見つけないと、と話すのだった」³⁴⁾。

ある日、デーヴィーデーインは村の議会、パンチャーヤット (Panchayat) に呼ばれた。すでに独立後なので、伝統的な村やカーストの長老五人衆ではなく、憲法上規定された自治の単位としての村議会である。けれども、実質的にはまだ長老の集まりの性格が強い時代であり、その長であるサルパンチ (Sarpanch) にプーランの父は訴訟

を取り下げるように言い含められる。自伝の記載によれば、「娘たちのことを考えたことがあるのか。どうやって結婚させるといふんだ。四人も娘がいるじゃないか。訴訟をしていたら、娘たちの結婚の持参金 (*dowry*、ダウリー) は払えないぞ」と言われた。「裁判所の決定を待ちます」と言うだけがやっとの気の弱い父親を、村の長老たちは冷淡に突き放したと、プーランは書いている。「みんなビハリーリーの友達だった」からだ、と。

裁判所に行く予定だった日、ビハリーリーはデーヴィーディーンに会って「訴訟を取り下げれば六〇ビガ (一 *Bigha* は約四分の一ヘクタールなので、六〇ビガは約一五ヘクタール) の土地をやる」と口約束し、デーヴィーディーンはそれを信じて裁判所に行かなかった。その結果、裁判は終了し、デーヴィーディーンには土地の権利は一切与えられなかった。プーランによれば、ビハリーリーは、父が「自分の訴訟の時に裁判所にいなかったじゃないか」と空とぼけたという。訴訟が終わるか終わらないかのうちに、叔父は早々とプーランの父が所有権を主張していた土地を売ってしまった、その収入で井戸の付いた大きな家を建てた。他の土地は早々に息子のマーヤーディーンに譲り、さらにマーヤーディーンは自分の娘の名義で土地を登録したといふ⁽³⁵⁾。

一九五〇年代から六〇年代にかけて、社会主義国家インドの土地政策の中で、大地主が国家に対する徴税請負人、すなわちザミンダリー (*zamindari*) として君臨するような社会構造を変革するために、ザミンダリー制が廃止され、土地所有規模の上限を規制する法律が施行された。しかし、そうした土地改革を謳った制度的変化の下では、隣同士や親戚同士の農民が、死にもぐるいで競合するような状況が作り出されていた。農民がただ単にまじめで正直なだけでは生き延びられない時代が、プーランの生まれたような辺境の村でも始まっていたのである。しかも、プーランから見れば、国家の「法と秩序」は、お金と権力を持つ叔父の不当な要求を認め、貧しくて弱い父を蹴散らすものであった⁽³⁶⁾。

ただし、プーランの暮らしは本当に村のどん底だったかという点、必ずしもそうではない。彼女の家族よりも厳

しい暮らしをするマッラーの人々がいたことは、自伝の中で食べ物恵んだ隣人の話で出てくる。彼女の眼中には入ってすらいらない、もつと下層のカースト、とくにかつてのアウトカーストの人々もいたからである。けれども、土地もなく病気がちでふがいない父親しか頼りにすることのできない娘が、富裕な徒弟の生活を眼の当たりにして、どん底感をかみしめて生きていたことは想像に難くない。「あの土地があつたなら」という、貧しい農民なら心底身に沁みる繰り言とともに、プーランは成長した。

2 飢えて虐待された子ども

プーランは、物心付いたときから、「おまえは生まれてこなかったほうが良かった」という母親の言葉を聞かされながら育った。自伝でも他の伝記においても、母親の叱咤の言葉として、それが残されている。窮乏の中で子どもを安心して育てられない親は、思わずそうした言葉を口にするかもしれない。しかし、長女ルクミニと違って、次女のプーランは、誕生の瞬間から余分な存在となった。両親は跡継ぎの男の子を待望していたのに、母親の胎内から出てきたのは女の子だったからである。

私は母の怒りとともに生まれた。「おまえがお腹にいたとき、食べたものは全部吐いたよ」と言ったことがある。「私のせいでそんなに気持ちが悪かったなら、なんで生まれた途端に首を絞めて殺さなかったの」と聞いた覚えがある。私
が女の子だから、私が母の気分を害したから、私が母に心配ばかりさせていると、母が嘆く度に、泣き出したくな
った。けれども、泣きはしなかった。黙っていたらずらをした。だから母は私を叩いて、男の子を一人しか授けてくれな
った神様の前で悲嘆に暮れたものだった。⁽³⁷⁾

先に長老の言葉を引いたように、この地方では伝統的な慣習が厳しく、女の子は育てあげた後、持参金を付けて夫の家に送り出さなければならぬ。しかも、女の子である限り、嫁ぎ先を見つけないということは許されない。したがって、家計を圧迫するだけで、将来の頼りにはならないと見なされる女の子の誕生は、貧しい家においては神に見放されるような悲劇である。そして、貧乏人の子沢山と揶揄されるほど、貧しい家庭でも女性が子どもを生み続ける重要な要因は、跡継ぎの男の子を必ず生む必要があるからである。

けれども、プーランの母親はなかなか男の子を授からず、プーランの下には二人の妹がいた。母親のお腹がまた大きくなったとき、姉妹二人で興奮したことが、自伝で描かれている。めったにお祈りをしない母親が、「神様、どうぞ男の子をください」と願いを掛けていた。けれども、誕生したのはまた女の子で、母親は母乳では育てないと宣言し、幼い姉妹が世話をしなければならなかった。「よそ様の山羊の乳を盗んでも、赤ん坊に乳を見つければならぬ」かった。けれども、その前に生まれた二人の赤ん坊は死んでしまった。母親は「神様に連れて行ってもらって良かったよ」と言った。夜に星が出ると、「妹たちはあそこにいるよ……空の星になったんだよ」と。プーランは、「いつか自分も死んで夜空の星になるのかと思って怖かった」と書いている。⁽³⁸⁾

私たちは、「女の子を育てて何になるっていうの。誰がこの子たちと結婚してくれるの」と怒り嘆く母を恐れていた。「満足に食べるものさえない。どうしてこんなにたくさん女の子を産んだのかしら」。プーランには、母の言葉が、自分たち子どもが家の中の食べ物や泥棒だと非難しているように聞こえた、という。

あるとき、母は私たちの腕をもぎ取らなければかりに引つ張って、「もう井戸の中に飛び込んでやる。この子たちを先に投げ入れて、その後に自分が飛び込むわ」と父に向かって叫んだ。私は怖じ気づき、(妹の) チョーティーは怖さでふるえだした。「お母さん、私を井戸に投げ込まないで」と、チョーティーは泣いて頼んだ。「お願い。もしも投げ込まれ

たら、死んじゃうから」と。寒い季節で、私たちが何も食べるものがなくなってしまったとき、けれども叔父のビハーリーは何でも持っていたときのことである。⁽³⁹⁾

気丈な母モーラは、気が弱くて神に頼んでため息をつくだけで、自分では土地問題を打開できないほど甲斐性のない夫に心底苛立ち、食べ物のない貧しい生活にも絶望していた。そして、この辛さをおつける相手は、夫以外には幼い女の子たちだったのである。

自伝で書かれた子ども時代の記述のほとんどは、飢えと母親の怒りと子どもへの折檻についてである。食べ物がない。お母さんは怖い。お腹が空いても、他人様のものは食べてはいけない。大人並みに労働しても、食事にありつけるとは限らない。泳いで捕まえた川の魚とは違って、木に成る果物や畑の作物、徘徊している山羊の乳は、必ず誰かのものに属していて、勝手に食べることは許されない。どうしても欲しくて思わず食べたら、泥棒呼ばわりされて引きずり回され、打擲され、村中から一家が辱めを受ける。その繰り返しである。

このようにプーランは、精神的にも肉体的にも虐待された、暴力を受けて育った子どもだったと言っても間違いない。親には保護されず、姉として妹たちの世話をし、畑仕事や火事を手伝う毎日であった。ある時には、牛を追わずに遊んでいたのが、母親にひどく叱られて棒で叩かれたのが祟って、背中が腫れて化膿し、ほとんど寝たきりになってしまった事件が書かれている。医者の治療も受けず、母親が暖かい泥を貼り付けたり、薬効のある樹木ニーム (*neem*) の葉から作った湿布を貼ったり、ミルクを飲んだりただだけで、数週間苦しんだという。古代叙事詩『ラーマヤナ』にちなみ、シータ妃を連れて凱旋したラーマ王子の帰郷を祝う秋のデイワリ祭りの日に、留守宅に一人で寝かされていたら、化膿したところが裂けて出血して流れ出した。そのため大きな穴が背中に空いたが、その後徐々に回復したと書かれている。⁽⁴⁰⁾

もつとも、こうした子どもの育ち方自体は、貧しい家族の中ではけっして例外的ではなかった。

殴られたときには、一人で川に行って泣いた。そして、動物に生まれ変わらせてくださいと神様に祈った。動物には金持ちも貧乏人もない、食べ物をもらって世話をしてもらえる、勉強しなくても何が必要かをよく知っている。私たちが穀物を盗むネズミでさえ、私たちよりも賢かった。⁽⁴⁾

「生まれてこないほうが良かった」と言われて育ったプーランは、最低限の食事をしているだけで、貴重な食糧を盗むような存在だと感じさせられた。お父さんの土地だと思っていたところから、自分の手で植えた作物を取れば、盗人だと罵倒された。子ども時代を語る語彙として、驚くべき頻度で「盗む」という言葉が繰り返される。しかし、自分が盗人だと呼ばれた、あるいは盗まざるを得なかったという認識と裏腹に、次第に正当な権利を自分のほうが奪われていたという認識が芽生えていった。父の土地を盗んだのは、叔父である。父と自分が働いた賃金を払い決して盗み取ったのは、雇い主の地主や商人である。より大きな盗人は叔父や雇い主であり、自分たちは被害者である。しかし、こうした認識にもかかわらず、盗むことが正義につながるという認識には、まだ距離があった。

この、プーランなりの「モラル・エコノミー (moral economy)」の論理は、断固として正当な取り分を主張するという姿勢に現れた。雇い主に賃金をもらえなくても、泣く泣く引き下がってしまふ父親を横目で見ながら、妹と自分が草刈りの労働でただ働かさせられそうになったときには、強圧的に相手を脅して支払させたという話が出てくる。強くなければ舐められる。舐められたら食べていけない。暴力や知恵で相手を従わせなければならぬ。賢くて勇気があり、家族に対して強い責任感を負った生気に溢れた少女が、厳しい貧しさに学んだのは、このジャン

グルのような掟だった。⁽⁴²⁾

3 幼児婚と夫の暴力

子どもであって子どもでなかった、そうしたプーランの子ども時代は、まさに子どもであって子どもであることを許されない結婚慣習によって、早々と終わらされた。通説では、一才のときに結婚したとされる。まだ初潮もない、身体的には子どもの年齢だった。

一九世紀前半以来、インドにおける幼児婚の慣習は、社会改革派の批判や国家による統制政策の対象とされてきた。幼児とすら呼べるような女児に、結婚相手としてカースト的に適切な男性を見つけて結婚を約束し、一〇歳前後の少女と呼べるような年頃になると家同士の正式の結婚式を行う。一八二九年に、イギリスの下で結婚年齢が法律で制定されて以後、長い間かけて徐々に合法的な結婚年齢は引き上げられ、一九七三年の憲法改正では、結婚可能年齢が男性二二歳、女性一八歳となった。日本よりも高い年齢である。したがって、プーランが一歳で結婚したことは違法だが、実際に結婚した当事者や家族が罰則を受けることはほとんどなく、社会慣習としては今なお十代初めで結婚する例はなくなっていない。⁽⁴³⁾

娘の結婚は、資金を要する大事件ではあるが、良縁で玉の輿ともなれば、娘を送り出した実家も安心できる。プーランの父は、姉ルクミニの結婚のために、近隣の村の候補者と会い、他の村まで行って土地を担保に持参金と結婚式のために二〇〇〇ルピーを借りてきたと、伝記の著者は記録している。結婚式の当日になって、新郎の一行が来ないのでどうしたのかと危ぶんでいると、マヤーデーインと村長が警察を連れてきて、父親が貸した金の片に娘を嫁にやろうとしていると訴えたという。村長は金を渡せば許してやると言い、父親は結婚のために調達した資金を渡し、マヤーデーインは結婚式に用意した牛を警察署長に贈り物としてしまった、と。少なくとも、プーラ

ンはこのように事件を記憶していた。借金のある父親が、マーヤーディーンと争っている土地を担保に嘘を言つて金を借りたということになるだろうか。

ともかく、このように、幼児婚を取り締まる法律は、村の実力者が弱い者を虐めるために利用されるほうが多くなる。結果として破談になったルクミニの場合、すぐに他の近隣村の、大変に貧しい家の青年ランパールと結婚するよう取り決められた。姉はしばらく親元で暮らした後、夫の待つ村へと嫁ぎ、すぐに子どもを生んだ。彼女もまた十代で子供を持った母親になったわけである。

プーランも姉の後を追うように、縁談が進められた。従弟のマーヤーディーンが両親に紹介した相手は、川を渡った向こう岸の村の、とうに三十路を越えた人物だった。プーランの両親が決めるよりも、村の長老たちがこの縁談について議論して決めたらしい。しかし、プーランの母親も、気性が強くてとても無事に片づきそうもない娘をもらってくれる人がいるなら、と結婚の手続きを進めた。ある日、従弟が相手の男を連れてきて、その男はプーランを見定めて条件を交渉した。父親は「処女です」「誰もまだ手をかけていない生娘です」と言い、相手は「そんなのは当然だが、持参金はどうしたいか」と切り出して、父親は現金での支払いを望んだが、この婿は「乳牛と自転車がいいな」と答えた。母親は慣習に従って結婚氏の後も三年間は娘が実家にいられるように頼んだが、夫はそれを認めるかわりに、持参金を一〇〇ルピー引き上げた。それでも、姉のときよりも見落とりがしたと言われながらも、両親はまた精一杯の借金で結婚式を執り行った。

こうしてプーランの家族のように、女の子が四人もいて一番末の子が男の子だとすると、親は、生まれたときから四人ともきちんと結婚させられるだろうかという不安を抱いて暮らしている。よほど豊かな家でない限り、四人の娘を嫁がせるために借金をして持参金を用意せざるをえないが、借金を返す見込みがないほど貧しいと、最初から足下を見られて、良い縁談は来ないし、金を貸す人もいない。上の姉妹二人は、貧しさから抜け出ることができ

ずに、運命的に夫を与えられてしまったことになる。

幼児婚とは言いながら、通常は、プーランの母が望んだように、結婚式で夫婦が結ばれた後、妻が十分に成熟して初潮を迎えるまでは親元で暮らすことが慣習である。それまでは、中途半端な地位だけれども、自分の親の下で子どもとしての生活を続けることができる。特に身体の小さかったプーランの場合には、まだ数年は両親と一緒に生活すると思われるのだが、結婚式から数ヶ月後、夫は突然彼女を自分の家に連れて行ってしまった。着いてこないなら離縁するという脅しとともに。

その後のプーランは、身体が小さいことを夫に責められ、暴力を振るわれ、性的虐待を受けた。彼の最初の妻は、一四歳で最初の出産をして、命を落としたと聞かされた。親元から引き離されたプーランは、夫の家で奴隷のように働かされ、満足な食事も与えられず、日常的に暴力を受け、強姦と監禁すら耐え忍んだ結果、重い病気にかかった。娘が死にかけているという噂を聞いて、父親が連れに来るが、夫は「だまされたのは自分のほうだ」と言って、一万ルピー払わないと返さないぞと脅したという。それでも父が逃げるように娘を医者連れて行くと、はしかだと診断されて、結局一〇ルピーの薬を買って自分たちの村へバスで帰った。

プーランは、こうして実家に戻ったのだが、出戻りは家族の恥であり、夫の方は妻を放り出したと言いふらして離縁してもいらないので、もう二度と結婚もできず、女性としての将来はないも同然となった。従弟のマーヤーディーンは村長とともにやってきて、この書類にサインすれば、夫がプーランを追い出していないと証明できると誘ったが、それは土地の権利を最終的に放棄するような内容の文書だったので、母が許さなかったという。プーラン、一三―一四歳の頃である。その後、もう一度夫の元に戻されたが、すでに新しい妻が居て、その人の奴隷のように働かされ、食事もらえずに虐待された場面が、詳細に語られている。

貧しい両親の元を去り、それなりに食べていけるほど頼れる農民に嫁いでいけば、プーランも、しっかりした働

き者のお嫁さん、気の強いお母さんとして、何人もの子どもを育てていたかもしれない。けれども、幼児婚によって痛めつけられ、女性にとつては唯一人生に保障を与えてくれる制度としての結婚という道を閉ざされ、自分の村にも親元にもまともな形では帰れないような状態に陥ってしまった⁽⁴⁾。

4 誘拐から盗賊の首領へ

とはいえ、結婚後のひどい生活から逃げ戻ったプーランは、まだ十代半ばの少女だったが、父親の労働を助ける右腕としての力を発揮していた。気の弱い父親に代わって村の中で一家の権利を主張する強く賢いプーランが、結婚の破綻という最悪の事態をも甘受する覚悟で戻ってきたことは、従弟のマーヤーデーインにとつて大きな誤算だったらしい。その結果、子ども時代にはプーランに対する暴力的な折檻や両親への嫌がらせで済んでいた迫害が、警察を巻き込むような大きな騒動に拡大した。

先述したように、ニームの木は、インドではミントのようなハーブとして歯磨きや葉や虫除けに使われる。この大事な樹木だけはまだ父親の家にあつたのだが、ある日、叔父のマーヤーデーインは腕っ節の強い者を従えてこれを切り倒しにきた。しかも、止めようとしたプーランは騒動を起こした者として警察署に拘留され、それは複数の警官による強姦をも意味した。母親は二万ルピーもの保釈金を支払ってプーランを釈放してもらうが、村の中にも居場所がなくなつたために、彼女は姉の嫁ぎ先の村に身を潜めた。けれども、その間に叔父の家が盗賊に襲われ、プーランが盗賊の影で糸を引いていたという噂が流されてしまう。実際には、盗賊の襲撃があつた日には姉に付き添って病院に行き、書類に指紋でサインしていたことから、プーランは自分の村にいなかったことが公的に証明されてはいたが、それでも、村に戻つたプーランは再び逮捕される。そしてまた警察での強姦と取り調べを受け、三週間も留め置かれることとなつた。一九七九年一月のことである。

母親が訴えて無実を証明しようとするが、地元の警察は貧しい低カーストの言うことは聞いてくれない。警官に脅されて、「何も言うな」と言われるので、プーランは裁判で一旦は有罪を認めたが、暴行の跡があまりにも露骨だったため、裁判官が無罪の判決を下して彼女を釈放した。このときもまた、両親は借金をして弁護士費用を工面せざるをえなかった。このように親戚同士の対立がエスカレートして、村の会議だけでなく司法や警察を巻き込んで悪化の一途を辿った。従弟の強圧的かつ暴力的な脅しに対して、母親の知恵でプーランの一家も近隣の村の地主で有力者のタークルに相談をしに行く。そしてそれに対抗するように、従弟の側もタークルの強い男たちを味方につけてプーラン一家を襲った。母親が町まで出て警察に訴えに行っても、警官はせせら笑って守ってくれるどころではなかった。⁽⁴⁵⁾

こうして、ある日、プーランはタークルの率いる盗賊団に誘拐され、ジャングルに連れて行かれる。幼い頃「背の低い茂みが生えていて、トラ・ヒョウ・ジャッカル・フクロウ・蛇のような野生の動物がたくさんいるジャングルがあつて、夜になると太陽が眠ってしまうジャングルの向こうでは、世界が終わってしまう」と恐れていた「チャンバル溪谷」に、こうしてプーランも強制的に引き込まれていったのである。⁽⁴⁶⁾

しかし、盗賊団の首領は、殺すはずだったプーランを仲間の前で強制的に強姦した上で、自分の愛人として取り扱うことにした。首領はタークルであり、すでに述べたように盗賊団もまた未だにカースト的な上下関係を基礎に成り立っていて、下層のカーストから入ってきたメンバーが下働きや危険な仕事をするという組織だった。プーランは、すでに述べたように、漁民カーストのマッター族の出身だったが、首領のいいように強姦され虐待されるプーランに、同じマッター・カースト出身でこの盗賊団に加わっていたヴィクラムが思いを寄せ、ついに首領を殺害して彼女を救い、二人で逃げ出して自らが率いる盗賊団を形成したという。こうして、ヴィクラムとプーラン盗賊団が成立したのである。

盗賊の世界は、メンバーの集団への忠誠がないと生き延びられないので、厳しい規律が課されるが、同時に離合集散、同盟や裏切りによって日々闘争が繰り返されている世界でもある。とくに政府によって盗賊掃討作戦が強化されると、盗賊の間の争いも加速し、組織的な分裂・提携・合併が生じ、ライヴァルの失脚を狙ったり復讐劇を演じたりと、警察組織を巻き込んだ慌ただしい動きが起こりやすい。プーランの周辺では、一旦は決裂したはずの、タークル一族に属す元の盗賊の首領が、親戚の者が警察から釈放されるのを契機に、ヴィクラムに助けを求めた。これは毘ではないかという緊張がプーラン⇨ヴィクラムの盗賊団に走り、プーランは反対したが、結局ヴィクラムはこの求めを拒否できなかった。この一連の展開は、裏切った盗賊団と警察の仕組んだ作戦だと言われ、ヴィクラムは警察との「遭遇」で射殺されたという噂が伝えられたが、実は、ヴィクラムの部下でマッラーより少し身分の高いカーストのグジャールに属していたラーラ・ラームとシュリ・ラームが、首領の彼を殺したと言われている。一九八〇年八月のことである。

ヴィクラム亡き後、プーランは捉えられ、首領の愛人の地位も他の女性に奪われた挙げ句、タークルの人々の住むベーマイ村で辱めを受けたとされている。しかしまもなく、プーランは、ムスリムの盗賊団のリーダーとしてこのチャンバル溪谷周辺の地域で当時もっとも恐れられたムスタクイーム (Mustaqueem) に救出され、彼の一团に加わった。ムスタクイームは女性に対して「紳士」として振る舞うという評判が高く、彼の下で体力を回復したプーランは、再び指導者として立ち直った。こうして成立したムスタクイーム⇨プーラン盗賊団は、ヴィクラム暗殺への報復のために、ラーラ・ラームとシュリ・ラームが立ち寄ったという情報のあったベーマイ村を襲撃したが、一九八一年二月一四日であった。

この日は、盗賊掃討作戦のために展開されていた警察組織と州武装警察隊 (Provincial Armed Constabulary : PA C) が、州境まで農民デモに対する警備のために移動したため、警備が手薄になっていた。そうした好機を捕え

て、警察署長（SP）のバッジを付けた女性、すなわちプーランに率いられて警察の制服を着た四〇名ほどの男たちがベーマイ村を襲った。彼らは、ラーラ・ラームとシュリ・ラームを連れ出すように命令し、貴重品から台所の料理道具に至るまですべてを引き渡せと要求した。抵抗すれば殺すと脅されて、村人は家から出されて川辺に並ばされ、最後には銃殺されたという。二二名が殺されたが、たまたま生き残った男性が現場の様子を証言した。⁽⁴⁷⁾

自伝によれば、この作戦には周到な準備を行い、町や村の協力者から警察の警戒作戦や敵のダコイトの動きについての情報を入手し、資金を使って警察の制服・十分な武器・移動手段を確保して、襲撃計画を進めたいらしい。村人が警察を信用しない理由は多々あるが、ダコイトは武器や弾薬とともに制服も警察から買っている、と言われてる。泊まることなく逃げ回る盗賊にとっては、とくに靴が重要で、警察や軍隊の配給物がもともとの質の高いものである。ダコイトは町で警察の制服を調達して着用し、警官のように堂々と活動していたが、それだけでなく、村人は信用できない警察ではなく、怖いけれども頼りになるダコイトに対して「保護料」を払い、安全保障を買っていたという。「警察は村人を犬扱いしたが、ダコイトは私たちを人間的に扱ってくれた」。盗賊からすれば、地元暮らしの人々から情報・食糧・隠れ家などを供給してもらうためには、彼らを大事にしなければならないという事情があった。

そのように合法の世界と違法の世界の相互に依存しあう関係は、一九世紀にイギリス人官僚が書いた文書を読んでも昔から存在していたのだが、一九七〇年代から八〇年代にかけては、以前までとは異なるものに再編されていったと考えられる。すでに述べたように、もともとダコイトは特定のカースト集団としては組織されず、上層のカーストの者から下層のカーストの者までを網羅して構成されていた。それは、インドの村社会がブラーフマンやクシャトリアだけでは機能できなかったように、盗賊社会でも、指導的な上層のカーストが従属的な下層のカーストのより卑しいとされた労働を必要としていたからであり、他方では、上層のカースト出身の盗賊なら、村の有

力者を親戚に持ち、警察との交渉力など下層のカーストのダコイトにはないリソースを使えて、首領として優位に立てたからである。

けれども、民主主義と開発のもたらした社会変動ゆえに、カースト的な秩序も安定的なものではなくなり、下層のカーストが上層のカーストとより対等に自己主張する時代が始まりつつあった。身分的に差別されてきた人々が、政治・経済・社会的な上昇を遂げるようになっていた。もともと顕著な動きが、上層のカーストが支配してきたインド国民会議派に不満を持ち、下層のカーストを主体とする多数派の人々が、反会議派を掲げたジャナタ運動の諸政党を支持するようになったことであった。それが、一九七七年にインディラ・ガンディー政権の失墜をもたらし、国家的にもジャナタ連合政権を成立させていた。この政権の最も重要な検討課題が、「指定カースト・指定部族 (Scheduled Castes/Scheduled Tribes)」として憲法的に保護されてきたかつてのアウトカーストや先住民の人々よりも上に位置するが、やはりカースト的な身分が低く経済的にも恵まれない人々の多い集団を「他の後進諸階級 (Other Backward Classes : OBC)」と法的に規定して、政府が優遇政策を行うという新しい優遇措置の導入であった。

こうした「下克上」が起これば、当然、それに対する反動も引き起こす。当時、ビハール州やグジャラト州では、大学の入学試験をめくってブラーフマンやクシャトリアなどの上層カーストの若者がSCの若者を襲撃するという事件が起きている。農村地域では、低いカーストの人々や山の先住民たちに対する見せしめ的な焼き討ちやレイプ・暴行事件などが頻発した。依然として行政や警察の権力を握っていた地元の高いカーストの地主や商人などは、暴力的な集団を雇って私的なリンチを行っただけでなく、役所や警察や裁判所を味方につけて貧しい下層の人々を強圧的に押さえ付けることが目立って増えた。したがって、それに対抗して、下層のカーストに属していた人々も、自分たちの自警団を求め、カースト的に親密なダコイトがそれを提供したということは十分考えられる。



写真3 1983年に投降したプーラン・デーヴィー (India Today 表紙、2001年8月)

大きな流れの中で捉え直すことが可能だろう。(48)

プーランは、ベーマイ村の虐殺事件から一年半余り、チャンバル渓谷の一带で仲間と逃走を続けたが、やがて資金も部下も失い、中央政府からの指示を受けて仲介したマディヤ・プラデーシュ州の警察長官に対して投降することを決断する。彼女は、この投降について、当時のインドで最強の権力を誇っていた女性インディラ・ガンディー首相と交渉して対等な立場で武器を置いたのだと考えていた。しかも地主たちのタークルや叔父の味方に立ち、プーランの一家と盗賊団を苦しめ続け、ヴィクラムを殺したウツタル・プラデーシュ州の当局ではなく、盗賊も尊敬せざるえない規律をもったマディヤ・プラデーシュ州の警察に服すと決めたのであった。もっとも重要な理由は、マディヤ・プラデーシュ州グワリオルの刑務所に服役すれば、プーランに恨みを抱く「敵」だらけのウツタル・プラデーシュ州とは違って、取調中や刑務所の中で殺されることは免れるだろうという期待が強かったというこ

このようにカーストを軸とした「アイデンティティの政治」と「アイデンティティをめぐる暴力」の連鎖が始まった時代に、盗賊という無法者の集団も新たにカースト的な編成を促され、出身の血縁集団や村落との緊密な相互補助関係を形成するという現象が見られたとして不思議ではなかった。タークルの支配を打ち破って下層カーストのマツラーであるヴィクラムはプーラン盗賊団が台頭した意味も、ヴィクラムがタークルやグジャールという上層のカーストと警察に殺害された意味も、そのような社会の

とである。無法者は、取り締まる軍隊や警察の縄張りの違いを利用して生き延びる。州境の向こうに行けば生き延びられる確率が高まるなら、州境を越える。武力のみによって身を守ってきた野生動物のようなダコイトが武器を捨てるからには、そうした安全保障上の計算が不可欠だった。⁽⁴⁹⁾

投降した日に記者にインタビュールされたプーランは、なぜベーマイ村を襲撃したのかという質問に「当然の復讐だ」と答えた。なぜ投降したのかという問いには、「バグワティ・マター (Bhagwati Mata) を信じてマターの声だけを聞いているから、マターが命を投げ出せと言えば、投げ出すからだ」と答えている。⁽⁵⁰⁾ 死刑を含む有罪判決を前にしているならば、いかに無学であっても迂闊な発言をするわけがないが、この二つの答えはともにプーランが信じていたことに違いない。「母」をも意味する「マター」は、この地域で慕われてきた女神のことである。プーランは、盗賊の伝統を引き継いで、血なまぐさい襲撃に出かける前には、必ずあらかじめ決めておいた道路脇の聖なる場所を選んで、女神に供え物をし、静かな祈りの儀式を行ってから出発した。復讐はプーランにとっては、神にかわって正義を下すことに他ならなかった。常に死の影に脅かされている無法者にとって、神の加護は大切な拠りどころだった。

5 貧しき者にとっての「法」

以上、プーランという一人の女性の盗賊としての生き様を辿ってきた。彼女にとって国家とは何だったのか。法とは何だったのだろうか。独立インドの民主主義や経済発展とは何だったのだろうか。

逮捕されたとき、誕生した日についての公的な記録のない彼女の正確な年齢は判明しなかったが、おそらくは二五歳か二六歳とされた。そんな若さの彼女は、すでに小さなときから、国家や法がいかに冷たく残酷で、彼女や親の「敵」たちの手の中にあるのかを思い知らされてきた。一家の貧窮化の発端でもあり結果でもあった土地問題だ

ったが、国家の登記制度や裁判制度は、無学で要領も悪い父親から教育も受けて目端の利くより若い異母弟が土地の所有権を奪っていくために利用された。「文書 (Gaper)」もろくに読めず、言われるままに署名するしかなく、弁護士に支払う報酬すら工面できない貧しい農民にとっては、「法の前の平等」は限りなく架空のものであり、法制度は本来ならば自分たちのものである土地を「盗む」ことを正当化するしくみに他ならなかった。

プーランと妹は小さな子どもだったときから、近くのカルピという町まで出てきて商家などの家の掃除をしてお金を稼いでいたという話も、この地域の県の役人をしていた老人に聞いた⁽⁵¹⁾。自伝に出てくるように子どもたちは学校にも行かずに、毎日、自分の家だけでなく、他家の農作業や家事労働を手伝って僅かなお金を稼いでいた。けれども、失敗をしたり、口答えをしたり、お腹がすいて何かを食べてしまったりして雇い主の機嫌を損ねれば、のしられ、叩かれ、泥棒呼ばわりされ、ひどい場合には村の議会に親とともに引き出されて裁かれた。暴力的な処罰や法外な罰金が課されたことは一度や二度ではなかった。彼女の証言がどこまで確実なものかは議論の余地があるとしても、こうした出来事は農村地域ではあまりにも当たり前の光景だった。

責めが自分にある場合はまだしも、雇い主のほうの気分や事情のために労働者のほうに何らかの損害の責めが帰せられるということは、めずらしくない。よくあるのは、働いた者は「盗み」をしていないのに、何かがなくなつたときに「盗み」をしたと責められ、大げさに裁かれて罰せられるということである。このような「えん罪」は、驚くほど頻繁に起こっている。それを裏返せば、いくら正直に一生懸命働いても、けちで意地悪な雇い主に仕事のやり方について文句を付けられて、約束した金額の労賃が支払われなとか、いつまでも支払いを延ばされるといふトラブルはよくある。けれども、相手は豊かな地主や商人なので、盾突いただけで明日から雇ってもらえないかもしれないから、雇われた側が仕方なく頭を下げ、差し引かれた賃金で満足したり、挙げ句の果てに賃金を踏み倒されても黙っていないなければならない。また、勇気を出して抗議をすれば、プーランのように、根も葉もない「嘘」

をつく嘘つきだと糾弾されるだけでなく、警察に連れて行かれて「犯罪者」扱いされて、暴行も受けた上に、有罪判決を受ける怖れすらある。だから、そんな負け戦を挑むより、面従腹背をしながら、雇い主の目を盗みながら、畑の収穫物をくすね、庭の木から果実を黙って盗んだほうが、割もよいし、小気味がよい。資本主義が身分差別を伴って展開している社会では、自由で平等な市民社会の「法」は意味を持たない。文書にも訴訟にも労働争議にもならないところで、静かに「日常的な抵抗 (everyday resistance)」が階級闘争として続けられている⁽⁵²⁾。

けれども、それに止まらない事態となったとき、弱い者は問答無用の理不尽な暴力によって思い知らされることになる。罪を犯してもいないのに、プーランは警察に突き出され、拷問のような取り調べを受け、警官に陵辱された。しかも、不当な暴力を受けたことについて警察に訴えに言っても、警察は事件を取り上げてくれない。まして警察が行う暴力事件なら、訴えに行く可能性すらない。インドでは、警察が事件として扱ってくれるということ「事件をファイルしてもらおう (to file the case)」というが、貧しい者が訴えてもファイルしてくれないばかりか、へたに町や村の有力者や役人や警察官を敵に回すと、でっち上げだと非難されるだけでなく、警察の不当な暴力や彼らの雇った盗賊や暴力団に襲われることを覚悟せざるをえない。したがって、公正な法の裁きや国家の保護を求めようとする権利すら持たない人々が、国民として存在している。

こうしてみてみると、かつてテリリーが指摘したように、このような国家は最強の「組織犯罪 (organized crime)」というべき様相を帯び、逆に、それに抵抗しながら生きようとする人々の一部は、合法の世界からはじき出されるか、あるいは自ら出て行って、盗賊となって犯罪的な方法で生活の糧を稼ぎ、合法的な手段では実現できない正義を執行しようとする。すでに、国家は暴力の一元的な支配に失敗し、政治的かつ法的な正統性すら保持していない。そのような状況の延長線上には、違法な集団であるはずなのに、有力な盗賊が一種の「法と秩序」を提供し、「もう一つの政府 (alternative government)」のような存在となるといった事態も生まれる。表の世界の政治

や経済や社会が、裏の世界を基盤とする盗賊団が支援しているからこそ円滑に運営されているという事実が、住民の誰の目にも明らかになる。チャンバル地域とは異なるが、二〇〇六年に調査したマデイヤ・プラデーシ州とウツタル・プラデーシ州の州境の地域では、「あそこは強力なダコイトの首領がいるから安全だ」という声を多くの人から聞いた。弱小の盗賊団もこの大手の盗賊には戦いを仕掛けないし、警察も手を出さない。盗賊の首領の息子が議員となっていて、まさに盗賊の下で地方の平和が保障されているというのである。⁽⁵³⁾

しかし、戦国時代的な流動期に盗賊の指導者となったプーランには、そうした安定的な政治も経済は与えられなかった。「弱きを助け、強きをくじく」盗賊として、地域を牛耳る権力者やその親戚に反抗したプーランにとって、国家の法こそ無法であり、それを正すための復讐が使命となった。そこに、プーランの「モラル・エコノミー」があったのである。

すでに述べたように、プーランの味方は「マーター」という「母」の名前を持つ「女神」だった。「マーター」は、破壊と創造のすさまじい力を持つ黒い肌の女神カーリー (Kali) やドウルガー (Durga) の変化したものとも考えられるが、同時に、天然痘やコレラなどの恐ろしい伝染病が広まると、村人たちが村はずれに食べ物を備えてこの神を村に招き入れて、病気を治してもらおうとする、優しい「癒しの神」でもある。「マーター」が「女神」であることと、プーランが「女神」^{デーヴィ}と呼ばれたことには、深いつながりがあるだろう。逃げ隠れているはずのプーランが、参拝する人々に紛れて地元の大いなる魅力の女神の神像に高価な宝石を飾って立ち去ったという話は、「盗賊の女王」について流布した神話の中でもっとも輝かしいものであった。⁽⁵⁴⁾

三〇年ほど前、命がけて警察や軍隊に追われる身となりながら、合法的な世界では得ることのできない「自由」を手にし、「悪者たち」を成敗した「盗賊の女王」に、民衆は惜しみなく喝采を送った。当時、独立から三〇年を経過したインドではあったが、国家の周縁はまだ闇の奥に深く沈み、合法と違法の境界線を行き来することで盗賊

たちは生き延び、民衆がそれを支えた。同じ頃、毛沢東主義を掲げたナクサライトと呼ばれる左翼的な武装集団が各地の農村地域で組織されて活動を活発化させたが、彼らと盗賊との間には、指導者の掲げる公式的な言葉の目的には違いがあっても、主体となった農民たちの国家や法に対する認識や暮らし方には、そこまでの隔たりはなかった。貧しい農民出身の武装する人々が示していたのは、ともに「原初的な反抗 (primitive rebel)」の原点であった。その力が国家的な規模の社会革命に結びつけられた時代もあったが、ほとんどの場合には許されない犯罪として国家によって鎮圧されたのである。⁽¹⁵⁾

- (1) 竹中千春「序章 周縁からの国際政治」『国際政治』四九号 周縁からの国際政治 (日本国際政治学会編、二〇〇七年一月)。
- (2) Tilly, Charles, "War Making and State Making as Organized Crime", Peter Evans et al., *Bringing the State Back In* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), p.181.
- (3) 「国民国家 (nation-state)」と対比する概念としての「植民地国家 (colonial state)」およびそれを継承した独立後の国家を、あえて「国民国家」とは呼ばない概念としての「ポストコロニアル国家 (postcolonial state)」にこだわらずに多くの文献があるが、Chatterjee, Partha, *The Nation and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories* (Princeton: Princeton University Press, 1993), なぞ、拙稿「ポストコロニアル批評」『南アジアを知る事典』(平凡社、二〇〇二年) 参照。
- (4) "Phoolan Devi Shot Dead", *Hindustan Times* (July 26, 2001); "The End of Phoolan Devi", *Frontline* (August 4-17, 2001).
- (5) Interview with Pamela Philpote, columnist, *The Indian Express*, August 24, 2001, New Delhi; "Protest in Phoolan's Constituency", *The Times of India* (July 26, 2001); "Phoolan's Killing is a Political Conspiracy", *SP, The Times of India* (July 28, 2001), なぞ、フーラン暗殺は話題を呼ぶ日本でも黒田龍彦『女盗賊フーランは誰が殺したのか』(ベストセラーズ、二〇〇一年) が刊行された。
- (6) "Phoolan Devi: The Surrender, End of the Trail", *India Today* (February 28, 1983), pp.150-157.
- (7) Hobsbawm, Eric J., *The Bandits* (New York: The New Press, 2000), p.7.
- (8) *Ibid.*, p.20.
- (9) *Ibid.*, p.8.
- (10) *Ibid.*, p.9.
- (11) 神的な人の姿を「拝む (seeing)」(ことは「ダルシヤンをいたたくこと (darshan lena)」であり、それによって人々がエンパワーされる)

- ヒンドゥー側については、オリジナルにはこのような構成だったと言える。しかし、二〇世紀後半になると、都市化の影響も現れて、さらにカースト社会は変化している。
- (25) Singh, op.cit. pp.33-34.
- (26) Ibid. p.65.
- (27) Ibid.
- (28) Kahn, pp. 134-35; Singh, p.42.
- (29) Ibid. p.42.
- (30) 学校教育を受けておらず、字の読み書きができないプーランは、獄中にあるときにフランスから来たジャーナリストのインタビュウを受けて、自伝の発行を認めた。それが、Devi, Phoolan with Marie-Therese Cuny and Paul Bambali, *Phoolan Devi: The Autobiography of India's Bandit Queen* (London: Warner Books, 1996) 邦訳は「プーラン・デヴィ『女盗賊プーラン』(全二巻 武者圭子訳、草思社、一九九七年)。プーラン自身はあまり認めたくないが、Sen, Mala, *India's Bandit Queen: the True Story of Phoolan Devi* (London and San Francisco: Pandora, 1993) 邦訳はマラ・セン『インド女盗賊プーラン・デヴィの真実』(鳥居千代香訳、未來社、一九九八年)。映画も作られ、日本でも一時は評判になった。The *Bandit Queen*, directed by Shekhar Kapur; produced by Bobby Bedi, 1994. 邦題は『女盗賊 プーラン・デヴィー』。この映画にこいてフェミニスト雑誌がインタビュウしたものは、Kishwar, Madhu, "The Bandit Queen", *Manushi* (Sept.-Oct.1994), no.84, pp.34-37.
- (31) Devi, Phoolan, op.cit. pp.16-17.
- (32) Ibid. p.17.
- (33) Ibid. p.16.
- (34) Ibid. p.17.
- (35) Ibid. p.18.
- (36) 独立後にウツタル・プラデーシュ州となった植民地時代の統合州は、ガンジス川のより下流域に位置するビハール地方やベンガル地方と並んで、ザミーンタールによる大土地所有の顕著な地域だった。独立時には、「約八パーセントの農業世帯が州全体の土地を所有し」、そのうちの「九八パーセントは二五〇ルピー以下の地税しか納入しない小規模な土地所有の世帯であり」、裏返せば「一・三パーセントのザミーンタールが土地の五分の三を所有していた」。したがって、「二〇〇万人を越えるザミーンタールのうち、わずか三九〇人のみが地税全体の二三パーセントを納入する」という状況だった。Zoya, Hasan, op.cit. p. 152.
- (37) Devi, Phoolan, op.cit. p.12.
- (38) Ibid. p.13.

表1 1931年センサスに基づくウッタル・プラデーシュ州*のカースト集団構成

カテゴリー	カーストの名称	全人口に占める割合	
A. 上層カースト** (Upper Castes)	ブラーフマン (Brahman)	9.2	
	タークル (Thakur)	7.2	
	バニア (Banias)	2.5	
	カヤスタ (Kayastha)	1.0	
	カトリ (Khatri)	0.1	
A 集団の総計		20.0	
B. 中間カースト*** (Middle Castes)	ジャート (Jat)	1.6	
	ブミハール (Bhumihar)	0.4	
	ティヤギ (Tyagi)	0.1	
B 集団の総計		2.1	
C. 後進カースト**** (Backward Castes)	ヤーダブ (Yadav)	8.7	
	クルミー (Kurmi)	3.5	
	ロード (Lodh)	2.2	
	コエリ (Koeri)	2.8	
	グジャール (Gujar)	0.7	
	カハール (Kahar)	2.3	
	ガダリア (Gadaria)	2.0	
	テーリー (Teli)	2.0	
	バライ (Barhai)	1.5	
	カチ (Kachi)	1.3	
	ケワット (Kewat)	1.1	
	ムラオー (Murao)	1.3	
	ナーイー (Nai)	1.8	
	その他	10.7	
C 集団の総計		41.9	
D. 指定カースト***** (Scheduled Castes)	チャマール (Chamar)	12.7	
	パーシース (Pasis)	2.9	
	ドービー (Dhobi)	1.6	
	バンギー (Bhangi)	1.0	
	その他	2.8	
D 集団の総計		21.0	
E. ムスリム***** (Muslims)	シェイク (Shaikh)	3.2	
	パタン (Pathan)	2.2	
	ジュラーハー (Julaha)	2.0	
	シェド (Syed)	0.7	
	モグール (Moghul)	0.1	
	その他 (ファキール Faqir、シュニア Shunia、テーリー Teli、ナーイー Nai、ダルズイー Darzi、カサブ Qasabなど)	6.8	
	E 集団の総計		15.0
	総計		100.0

参照：Zoya, Hasan, 'Power and Mobilization: Patterns of Resilience and Change in Uttar Pradesh Politics', Frankel, Francine R. and Rao, M.S.A. eds., *Dominance and State Power in Modern India: Decline of a Social Order*, Volume 1 (New Delhi: Oxford University Press, 1989), p.154: Table 2.

- * 独立前は「統合州(the United Provinces)」と呼ばれた。
- ** 「上層カースト」は、カーストの階層秩序の中で支配的だという意味で、社会学的に「支配カースト (dominant castes)」という概念も当てられる。このカーストに属す人々は、古代より「再生カースト」と呼ばれ、死後もう一度人間に生まれ変わる尊い人々と考えられてきた。ブラーフマンは僧侶階級、タークルは騎士階級、パニアは商人階級に属す。聖なる文字としてのサンスクリット語を学ぶことが許され、寺に参詣できる。ブラーフマンやタークルはザミンダールとして土地を所有し、パニアは商業や金貸し業を担い、社会経済的な支配力を持って、手を汚す農耕作業は行わなかった。多くのカヤスタは役人の仕事に就いた。
- *** 「中間カースト」は「上層カースト」より下だが、土地を所有して有力な農民が多かった。
- **** 「後進カースト」は1970年代後半より政治的・行政的に使用されるようになった名称。古くは「シュードラ」とされた、身分が低く貧しい農民が多い。後述するように、1980年代以降は、本文107頁および注④で説明するように、法的な優遇措置を求めて政治的な要求を始めた。
- ***** 「指定カースト」はかつての「アウトカースト (Outcastes)」「不可触民 (Untouchables)」と呼ばれた人々で、不浄の存在とされ人間的には扱われなかった。清掃・洗濯・死体処理など汚れた仕事を割り当てられ、その意味では生活上は必要不可欠な存在であった。しかし、村の井戸の使用や寺への参詣は禁じられ、彼らの触れたものに触れると汚れるとされて、厳しい差別と抑圧を受けてきた。しかし、注④で簡単に説明するように、1930年代に展開したアウトカーストの反差別運動の結果、独立後の憲法ではカースト差別は撤廃され、とくに「アウトカースト」の人々は「指定カースト (Scheduled Castes)」とされ、「部族 (Tribes)」として差別されてきた森の先住民である「指定部族 (Scheduled Tribes)」と並んで、政治的・行政的に優遇措置を受けられる主体となった。現在、前者はS C、後者はS Tと略称される。また、反差別運動をする人々は、古代以来の蔑称をあえて転用し、S Cの人々は「ダリット (Dalits 抑圧された人々)」、S Tの人々は「アーディヴァシー (Adivasis 森に住む人々)」とも自称するようになり、そのような呼ばれ方も今日では一般化している。
- ***** ムスリム (Muslims) は、イスラーム教徒を指す。11世紀以後、アフガニスタン系・ベルシャ系・モンゴル系・トルコ系などのイスラーム勢力がインド亜大陸の北西部より侵入し、数世紀にわたってガンジス川流域にいくつもの王朝を築いたため、この地方には多くのイスラーム住民が暮らしてきた。王族として身分の高い大領主や彼らに使える職人・商人がいたとともに、ヒンドゥー社会で差別されてきた身分の低い集団が平等を唱えるイスラームに改宗した結果、社会の底辺にもムスリムの人々が存在した。

- (39) Ibid. p.20.
- (40) Ibid. pp.42-44.
- (41) Ibid. p.25. インド社会における子どもを取り囲む環境の悪さ、子どもの虐待やネグレクトについては、現在でも深刻な問題が残っている。とくにジェンダー的な差別があり、女兒については新生児の殺害やネグレクトによる致死など、公の事件にならない人権侵害が多数引き起されいている。その結果、人口の男女比では女性が少ない、女性に対する差別や抑圧の慣習が強い北インドにはとくにそうした議論が妥当する。プーランの生まれ育った地域は、そうした保守的な環境のただ中にある。プーランが盗賊として活動した時代の女兒への虐待について、Bardhan, Pranab, "Little Girls and Death in India," *Economic and Political Weekly* (September 4, 1982), pp.1448-1450. 国際社会で「児童労働 (child labor)」と呼ばれる *チャイルド・ラボラー* の実態については Burra, Neera, *Born to Work: Child Labor in India* (Delhi: Oxford University Press, 1996).
- (42) 「モラル・エコノミー (moral economy)」という概念は、E・P・トムソンが使った概念である。共同体的な社会において、地主と農民、職人親方と弟子、教会と信徒、国王と領民、夫と妻や子どもの間などで、経済的な利益のやりとりをめぐる、不均等な主体の間で保護と奉仕の義務のバランスが確保されるべきだという正当で道徳的な感覚が、伝統・慣習・宗教規範などによって保持されてきた、という議論である。トムソン自身は、中世の森林や共有地が次第に近代的な国家の所有地として囲い込まれ、それと併行して自由に活動して都合の悪い人々を「法と秩序」の下に取り締まった絶対主義国家の時代を描いている。Thompson, E.P., *Whigs and Hunters: the Origin of the Black Act* (London: Allen and Labe, 1975). また、シームズ・C・スロットは、二〇世紀の東南アジアの農民運動にこそ、伝統的な社会での規範に基づく反抗の契機として「モラル・エコノミー」を論じた。Scott, James C., *The Moral Economy of the Peasant: Subsistence and Rebellion in Southeast Asia* (New Haven: Yale University Press, 1974). なお、プーランの世代の盗賊にもロマン・フッドのよきな義賊として記憶された「バートルカーン」という盗賊にこそ、Mukherjee, Kalyan and Sigh, Brij Raj, *Malkhan: The Story of a Bandit King* (New Delhi: Lancer International, 1985).
- (43) 生後まもなく婚約者が決められ、初潮を迎える前の完全に処女である段階で結婚を執り行うというインドの慣習は、一九世紀にイギリスの統治が始まって以来、「幼時婚 (child marriage)」として問題にされてきた。植民地政府のみならず、キリスト教的なミッション団体や近代的な西欧教育を学んだインドの社会改革主義者は、国民的な課題として幼児婚の慣習を廃止し、法的に可能な結婚年齢を設定することで、女子を保護し適切な教育を与えるべきだと主張した。最近の社会変化の中で、農村においても女性の結婚年齢は明らかに上昇しており、事態はかなり変わってきているが、それでも開発から取り残されて宗教的に保守的な地域においては、まだ幼時婚の慣習がなくなっていない。女性に対する厳しい差別・抑圧と、最近であれば「家庭内暴力 (Domestic Violence: DV)」と総称される近親者からの暴力については、一九七〇年代後半からインドの女性運動やフェミニスト研究によって明らかにされ、一九九〇—二〇〇〇年代には保護的な立法も実施されている。しかし、弱い立場に置かれた女性の人権侵害は現在でも深刻である。プーランと同時代の女性の状況についての当時の新しい著作として、

Kishwar, Madhu and Vanita, Ruth eds. *In Search of Answers: Indian Women's Voices from Mansuh* (London: Zed Books, 1984).

(44) Devi, Pooan, op.cit. Chapters 9-11.
 (45) Ibid. Chapters 15-16. レイプが一般的な容疑者よりも警察や軍隊という国家の法執行機関の一員によって行われるということは、紛争地域、盗賊地帯のような荒廃した過疎地域、マフィア的な暴力組織が根を張る大都会の闇社会においては、よく知られた事実だが、こうした問題についても、ちょうどプーランが盗賊として活動した時代、つまりインディヤ・ガンディーの強権政治がジャナタ勢力に対抗されるようになった時代には、下からの民主化を求める勢力によって問題提起されるようになった。同時に、そうした動きが女性を主体とした運動となり、相前後してフェミニズム運動とも重なるようになる。そのきっかけとなったのは、アンドラ・プラーデッシュ州ハイデラバードで起こった警察官によるレイプ事件であった。

たとえば、当時の共産党系の団体による資料として、People's Union For Civil Liberties and Democratic Rights (Delhi), *Rape Society and State* (Delhi, 1979) では、次のような報告が記述されている。プーランの出身地と同じウッタール・プラーデッシュ州の「バラバーンキーのクルシー警察署の警察官と署長がハリジャン (Harijan 「神の子」という意味で、ガンディーが差別撤廃運動の中で使った言葉だが、かつてのアウトカースト、現在の指定カーストであるSCCの人々を指す) の村の女性をレイプして殺害した。軽罪を理由に夫を逮捕しに警官たちが村を訪れたが、夫が逃げ出した後だったので、かわりに妻を捉え、レイプ・拷問・殺害した後、自殺に見せかけて死体をふらさげた」。あるいは、「ライプールのクンタ村の森林区の役人四人が、若い女性の家でレイプした。これは彼女の家が森林保護区の中にあるという理由で壊さなければならぬ」と役所が宣告してきたので、彼女の父親がニューデリーの首相の下まで陳情に行っている間に起こったことである」。

地方の役人や警官は公務員として恵まれた地位にあり、一九七〇年代まではほとんど高いカーストの子弟だったから、農村の地主や商人と役人や警官が手をつないで貧しい小作や農業労働者、低いカーストの人々、森に住む先住民系の「部族」などを迫害することはしばしば起こった。そうしたカースト差別、貧富の格差と階級対立をめぐって、地方権力や国家権力が絡み合い、国家の法執行機関に携る人々によって女性に対する暴力が犯されてきたのである。ビハール州シングム県で軍事警察が部族の一四名の女性をレイプし殺害した事件について、"Tribals: Women in Distress", *India Today* (September 30, 1982).

警察によるレイプへの追及を中心にしなから、国家と法がレイプという犯罪に目を向けず、事件を隠蔽し、容疑者を保護する特徴を持っていることを鋭く批判する女性運動が起こってきたことにつなぐ。Radha, Kumar. *The History of Doing: An Illustrated Account of Movements for Women's Rights and Feminism in India, 1800-1990* (New Delhi: Kali for Women, 1993), "Chapter 8: The Agritration Against Rape", 127-142. さらに、紛争地域でも反政府勢力を掃討し取り締まる軍隊や警察によって女性に対するレイプや残酷な暴行事件が起こりやすい。インドでは、たとえばそうした紛争地域の一つであるカシミールにおいて、こうした犯罪が、警察にはまったく刑事事件として「ファイルされない」まま、国際的な人権団体によって調査され告発されてきた。竹中千春「武力紛争とジェンダー——国際政治の中の南アジア」日本国際政治学会編『国際政治』第一三〇号(二〇〇二年五月)、一九二—二〇一頁。また、こうした政治的な暴力と女性に対する暴力の関係については、竹

中千春「女の平和——犠牲者から変革の主体へ」『講座 戦争と現代 第5巻 平和秩序形成の課題』(大月書店、二〇〇四年)、三一七—三六一頁。

(46) Devi Phoolan, op.cit. p. 16.

(47) ヴーマイ村の虐殺事件の前後についての当時の優れた取材は、Day of Reckoning, *India Today* (March 1-15, 1981), pp.30-33.

(48) ジャナタ連合政権が成立した一九七七年以後、政治的な支持層を確保するために下層カーストの待遇改善をめざす「後進階級委員会 (the Backward Classes Commission) で、委員長の名前を取ってマンタル Mandal 委員会とも通称される」が設立され、一九八〇年二月に報告書を出した。これは、憲法で優遇措置が認められたかについてのアウトカースト、独立後の行政概念では「指定カースト・指定部族 (SC/S.T.)」に次いで、「他の後進階級 (OBC)」についても法律的な優遇措置を実施するように勧告したものであった。Radhakrishnan, P.

「Backward Classes: In Defence of Mandal Commission», July 3, *Economic and Political Weekly*, July 3, 1982, p.1094.

当時の農民の行動力は、地方の農民が何千何万と集結して首都ニューデリーで頻繁に行われた「農民行進 (Kisan rally)」に表現されていた。Kisan Rally: A Show of Strength, *India Today* (April 1-15, 1981).

プーラン自身は、「二〇〇〇年筆者とのインタビューの中で、貧しい農民としてのアイデンティティと女性としてのアイデンティティを語り、とくにOBCとしての強い自覚を持ち、同じ下層カーストと言ってもSCとの区別が明確に指摘していた。政府の優遇措置を受けてきたSCについては、彼らは容易に補助金を獲得してきたので、「村でもSCだからりっぱな家が建っている」と語った。また、プーランの村では、村長がSC出身で彼女とは政党が違っており、プーラン家の母親は彼を嫌っていた。しかし、プーラン自身は、OBCとSCはともに貧しい農民だと考えて、対立関係とは捉えていなかったと思われる。

自宅や議員宿舎には、戦間期よりアウトカーストの指導者として活躍し、独立後は憲法制定委員会の委員長を務めたアンベドカルのポスターを貼り、カースト制度からの脱却をめざしてSCの人々が改宗している新仏教を意味する仏像を飾り、古代のアウトカーストの英雄神話のポスターを飾って、その意味を丁寧に説明してくれた。そうした彼女の思いとも関連して、所属政党のサマディワディ党は、OBCを党の中核的な支持母体としつつ、SC層とムスリムを含めた「虹の連合」として選挙キャンペーンを展開していた。すでに議員であったプーランは、当然、党首のそうした考えを学習していたと推測される。

なお、ウツタル・プラデーシュ州では、一九九〇年代にはインド国民会議派はほとんど議席を失い、反動的なヒンドゥー至上主義を宣伝するインド人民党 (Bharatiya Janata Party: BJP) と、プーランと同じようなOBCの支持を得るサマディワディ党 (SP)、最後に一九九〇年代以後にSCを支持層として急速に勢力を拡大したバフーシヤン・サマジ党 (Bahujan Samaj Party: BSP) の三党がしのぎを削った。人民党優勢の一九九〇年代の後、二〇〇〇年代にはBSPが勝利し、女性党首マヤワティーが州首相となった。ただし、どの政党も単独では政権が取れないため、必ず二党以上の政党の連合政権となっている。

(49) Devi Phoolan, op.cit. p.459. 選挙で再選されて権力に再び咲いたインディラ・ガンディーは、改めて女帝のような扱われ方で報道され

- た。"A Decisive Change", *India Today* (April 1-15, 1981), pp.32-40.
- (50) *India Today* (February 28, 1983), p.155.
- (51) Interview with Mr. and Mrs. Singh, retired district officer and his wife at their house in Kalpi, Uttar Pradesh, March 4, 2001.
- (52) Scott, James C., *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance* (New Haven: Yale University Press, 1985), ショートス・スコット「日常型の抵抗」, 坂本義和編『岩波講座・世界政治の構造変動 第3巻』(藤原婦一訳, 岩波書店, 一九九五年)。
- (53) Interview at Yanangana (NGO for Advocacy and Self-Help of Women), Chitrakoot, Uttar Pradesh, September 4, 2006.
- (54) Khan, op.cit. pp.52-53. 「ラーモーヤナ」にちなんだ古代の理想の王子ラーマンの信仰が篤い地域で、同じ女神が、「大女神」の意味の「マハーデーヴィー (Mahadevi)」や「偉大な母」の意味の「マハーマター (Mahamata)」とも呼ばれ、もっと親しみを込めた「お母さん」の意味の「マミー (Mai)」とも呼ばれる。「戦う女神」の意味を帯びて、ヒンド州では「女神騎士団 (バジラング・デーヴィー, Bajrang Devi)」勝利軍団 (ヴィシヤイセーニー, Vijayseeni)」という言葉も使われた。グワリオール州やモレナ州西部では、「石の女神 (バツタルワリー・マター, Patharwari Mata)」, ドールプル州やアグラ州南部では「石の女神 (カンカリーニ, Kankalini)」, そしてチャンバル渓谷ではとくに「剣の女神 (カラウリ・マター, Kauli Mata)」という呼び名が記録されている。
- 「シャクティ (shakti, 力)」を与える「戦う女神」の系譜は、アーリヤ人に征服される前の土着の神の様相として黒い肌を持つドゥルガー神に遡ることができ、その変化したものである。ドゥルガーの怒り狂った状態とされるカーリー女神は、真っ黒な肌に赤い舌を出したおどろおどろしい顔で描かれる。この地域の「マター」像の一つは、大きく切れ長の目をして、放漫な胸と豊かな腿を持つ少女であり、四本から八本の腕を持っているという。斧で水牛の姿を借りた悪魔を倒し、血のしたたる刀を振り上げ、右下の足の下に人間の顔をした悪魔の頭部を置いている。こうした豪華な女神像のある寺もあれば、村はずれの木陰に荒削りの石を女神として置いただけの寺もある。こうした女神のイメージがブーランに与えられたと言える。
- (55) Hobsbawm, Eric, *Primitive Rebels: Studies in Archaic Forms of Social Movement in the 19th and 20th Centuries* (New York: Norton, 1965); "Is India Waiting for Naxalites?", *New Delhi: The Asian Newsmagazine* (September 29-October 12, 1980) は、南のアンドラ・プラデーシュ州における農民運動を伝えている。